統一

第貳百拾壹號

佐渡に於ける日蓮上人　文學士　小林一郎

日蓮主義綱要　大僧正　本多日生

統一團翼賛員勸募の辭

海外の發展　海軍大佐　佐藤鐵太郎

拆伏餘論。教報數件

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可（毎月一回）
大正元年八月十五日發行第一卷第二百十號（十五日）

（東京　三秀印刷株式會社印刷）

日蓮上人云

夫以佛法流布之砌者天下靜謐也。神明仰崇之界者國土豐饒也。（乃至略）。然又近來不辨先規之輩不崇佛神之類再企專修之行猶增邪惡之甚矣。日蓮雖不肖且爲思天下之安寧且爲致佛法之繁昌。強宜說先賢之語欲停廢稱名之行。（念佛者追放宣狀縮遺文二七三頁）

統一團翼賛員勸募の辭

我國民は不幸にして維新以來宗教に對する適當の考慮を缺き冷眼に看過したりしが今や具眼の士女はその謬見より醒めて宗教の人生國家の上に有する切實なる効用を認むるに至り熱誠なる求道者頓かに多きを加ふ寔に慶すべく賀すべき事に屬す。

此時に膺りて健全なる宗教の興立振起を計圖するは是れ即ち人生を救濟し國家を擁護する所以の根本事業たるや明かに而して大聖日蓮に依りて主唱せられたる教義は之を眞理の研究より見れば最も正確なる意義を有し之を宗教の批判より見れば最も健全なる旨致を存し又之を倫理の講究國民道德社會制度等より見れば最も堅實なる主義を示すものにして日蓮主義の充全なる發揮は人生の上にも國家の上にも最善の効果を與ふるものたるや昭々として日星の如く茲に詳說するを須ひず蓋し日蓮主義の運用活動の事業に於ては未だ上人の本旨を暢達するに至らずこの方面より見れば決して遺憾なしと云ふを得ず不肖日生劫にして身を上人の門下に投じ爾來數十年左右を顧みずして區々の微衷を此に致せりその主義主張の發揚とその運用活動の調整とに於て未だ徵望を達せず慚愧何ぞ堪へん然れどもこの宗教的自覺の好機に際會して安んぞ晏然座視するを得んや自今益奮勵努力し以て知法思國の聖訓に副ひ奉らんと欲す。

不肖謂らく主義主張の方面に於ては中古以來の派別的確執を超脫して正々堂々上人の大志願に歸趣し屑々たる學見教義の末節に拘泥する無く大德教建設の理想に向つて邁進するを要す爰に異躰同心の遺訓を嚴守し相俱に力を戮せて不健全なる思潮を匡救するに努め所謂國民の健全なる思想の涵養に資し社會狀態の善良なる發達に貢献するを期すべし。

又運用活動の方面に於ては純粹宗教的の淸新なる信仰と國民道德を中心とせる堅實なる道念とを喚起し本經遺文の講義廣汎なる意義に於ける日蓮主義の講演男女學生に對する指導啓發一般人の爲にする演說說教雜

誌の發刊文書の布教を實行すべし。

これと同時に現實社會を指導匡救する爲に勞働問題社會政策の研究を怠らざるは勿論社會教育の講演會勞働者の慰安會を開催して彼等に必須なる通俗講話と清新なる娯樂とを與へ人事顧問部を開設して人生に煩悶せる者には精神的にも物質的にも懇切なる指導啓發を與へ法律的の問題に就て痛心せるものは無料を以て善良なる鑑定を與へその他人事に關する宗教的の事業を增設するを期し夜學會を開いて徒弟下女等の何等學術技藝を修得し能はざるものに殆んど無月謝を以て適當なる學業技藝を授くる事とし更らに事業の發達に伴ひ漸次に監督寄宿舍を數ヶ所に設置し男女學生をして修學時代に於て不知不識の間に宗教の信仰と堅實なる修養とを得せしめ猶國家社會を毒害するが如き主義と事業とに對しては深く留意してその蒙を啓き其害を去らしむべく爰に身輕法重の節義を守持せざるべからず。

又法要部を設けて敬度なる祈願壯嚴なる法要を勤修し宗教の儀禮に注意して此方面よりも現代人をして發心信仰に入らしむべし。

今や幸に統一閣の建築成るを告げ上述の理想を實現するに大なる利便を得るに至れり法悅之に過ぎたるはなし而して統一閣の建築とその維持とに就ては他の寄附援助を要せず永久の基礎を確立し得たり然れども自今上述の各部を開設して日蓮主義の發揚と同時にその運用活動の方面を全ふせんとするには廣く同志の贊助に俟たざるを得ず又俟つを以て至當の事なりと信ず不肖が既往十年間の奮鬪の感化と將來この計圖を實現せんとする微衷とに對し上述の趣旨に於て一片贊成の志を有し給ふ士女は快く統一閣翼贊員に加はりこの計圖を援助しこの淨業を成就せしめられんことを文は意を盡さず請ふ實諒せよ。

大正元年九月

統一閣設立者　本多日生

第一章　目的

第一條　本閣は日蓮上人の主義を宣揚し其の運用活動を全ふする爲め布教社會法要の三部を設け左の事業を行ふを以て目的とす

一　布教部　日蓮主義に關する講義講演說教の開設雜誌の發刊、文書布教等の事をなす

一　社會部　社會狀態の研究、通俗教育の講演、勞働者の慰安、人事顧問、夜學會、監督寄宿舍を開設する等の事をなす

一　法要部　清新なる祈願壯嚴なる法要を勤行し宗教儀禮の改善發達を期す

前各項の事業を實行するには本閣評議員會の議決を經て之に着手するものとす

第二章　名稱

第二條　本閣は統一閣と稱す

第三章　事務所

第三條　本閣の事務所は東京市淺草區北清島町十四番地統一閣に置く

第四章　翼贊員

第四條　本閣の目的事業を翼贊する者を翼贊員と稱し左の六種に分つ

名譽會員　聲望世に高く本閣の目的を贊成せらるゝ者

甲種特別會員　一ヶ月二圓以上五ヶ年間寄附せらるゝ者

乙種特別會員　一ヶ月一圓宛五ヶ年間寄附せらるゝ者

甲種通常會員　一ヶ月五十錢宛五ヶ年間寄附せらるゝ者

乙種通常會員　一ヶ月二十五錢宛五ヶ年間寄附せらるゝ者

贊助會員　一ヶ月十錢宛五ヶ年間寄附せらるゝ者

第五條　翼贊員の爲めに毎年壯嚴なる法要を勤行し二世の安樂と祖先の追祐を祈るものとす

第六條　翼贊員の寄附金は雜誌「統一」誌上に報告すべし

第七條　寄附金は一年兩度九月と三月に納附することゝし振替口座（東京壹貳壹九番）若くは郵便集金法に依るものとす

第五章　資產

第八條　寄附金は二分して一分を常用部に支出し他の一分は基礎金として積立つるものとす

第九條　常用金の支出及び基礎金積立方法に關しては凡べて評議員の議決を以て之を定む

第六章　會計

第十條　本閣の會計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月末日に終はる決算は毎年五月末日迄に評議員の承認を經て統一誌上に報告すべし

第七章　役員

第十一條　本閣には總裁一名、總務一名、部長若干名、庶務員若干名を置く、但し任期を設けず

總裁に設立者之に當り總務及部長は總裁に於て適當と認むる者を撰び之を囑托す

第十二條　總務は總裁の意を承けて本園一切の事務を處理し庶務員以下の任免は之を專行す

第十三條　部長は布教部、社會部、法委部の各部の一を擔任し總務の指揮を受けて各部の事業を處理す

第十四條　庶務員は各分掌の事務に從事す

第八章　評議員會

第十五條　本園は評議員若干名を置く

但し任期を設けず

第十六條　評議員は總裁に於て本園翼賛員中より之を囑托するものとす

第十七條　評議員會は總裁に於て必要を認めたる時之を開く

第十八條　評議員會の議事は出席者の多數意見に依りて決定するものとす

第十九條　評議員會の會長は出席者に於て之を互選す

第九章　補　則

第二十條　本則を變更する必要あるときは評議員三分の二以上の同意を經べきものとす

以　上

佐渡に於ける日蓮上人

文學士　小林一郎

私は只今紹介を受けたる小林と申す者であります、此の尊き會合に諸君の前に於て講演致しまする事は非常に光榮と存じます、今日承る所に依れば、　陛下の御惱も稍輕快に在らせらるゝ樣拜承致しました、而し吾々國民は誠心以て御平癒を祈り奉る時であります、此の時に當て多數の者が一堂に會合して講習するは、如何にと考へられます、乍併深く考へますれば、吾人は　陛下の御惱を神佛に向つて祈る事のみが祈念ではない、斯かる神聖なる會合に於て僧俗共に宗義を研究するも亦御祈念の一になる事と存じます、日蓮上人は六百年以前、尤も身に迫害を受け乍ら身輕法重死身弘法せられたのであります、其の精神たるや俯仰天地に恥ぢざるものであります、故に上人の此の教を信奉し此の精神を以つて、聖上の御平癒を祈り奉るべきものと信じます、從て集る吾人も極て凡俗であるが、上人の法義の下に集りて、上人の主義を御話するならば、數時間にして好く數日を費して祈願せし功德に相當するものと思ひます、故に今日此の御不例に際して此の會の講演は當然の事と思ふ、然し話すもの及び聞く者に於て、苟も懈怠の心があつてはならぬ、若し斯ゝる事ありとせば眞意義を失ふのであります、上人の御一生は毫も懈怠の念なく身心以て御弘通遊された事は御遺文に依て拜讀し得るのである、國民は誠心を以て國家の爲に盡すと曰ふ事は今更言を俟たぬ所である。

吾人は平素國運の隆昌を祈らざるものはないであらう其の國運の繁榮を祈る中には、吾々個人の安寧幸福も含まれ居るならん、即ち　陛下の御惱の御平癒を祈り奉る中には、吾人の安寧幸福をも含まれて居るのである、即ち皇室の繁榮を祈り奉れば日本臣民の安寧をも含まれて居るのである國家の前途も國民の前途も至尊陛下の中に含まれて居る、即ち凡ての希望を合して祈り居るのである、日蓮主義は倫理道德等の科學の一斑に依つて即座に解釋し得る者でない、即ち精神上に

立入りて之が考案を遂げざれば到底不可能である。

さて私の御話致さんとする所は、上人の佐渡御流罪の事に就いて、當時の狀況及び其御事蹟に就いて私の知りし範圍に於て諸君に御話致す考であります、松森君鷲尾君姉崎君等は專門に之を調べて社會に現しましたが、私は勿論此の處に於て諸君の前に御話すると曰ふ事は私自身として其れ丈けの資格がない、乍併先頃佐渡に赴き巡拜して感じたる一二の事項を御話致さんと思ふ、而し一向に材料も蒐り居らざる故甚だ諸君に充分に滿足を與ふると曰ふ事は出來ません、剩へ今日より開會の天晴會講演も延期と云ふ噂を聞き居りし所延期と云ふは無根なる旨聞き及び早速急に御話する事に成りました、何を御話しようか、實は當惑致して居るのですが、先達ても或る所での話でありますが、人間は迫害を受ければ受ける程力を知ると申しますが、私の今晩之の倉卒を來たせしも一の迫害では無いかと思ひます、而し此の迫害は世間に澤山あるのである、明後廿五日には何か調べてお話致す心得で居ります、今晩取敢へず佐渡に於ける日蓮上人に付いて自分の所感をお話致します。

佐渡に行くには二つの道筋があります、上野より十四時間にて越後の直江津に着しました、其間の道中には山又山と曰ふ風に、絶へず山の中斗りを通て居りましたが、直江津に着きますと、遠く雲煙眇茫と見ゆる一島が有ます、之が即佐渡であります、之を眺むる時は一種曰ふべからざる感を生ず、即何となく古への狀態を悲的に追想せしむるのである、關東平原より山又山を越へ、信州の山路に入りて更に新潟の海岸に至るは恰も夢の如き感じがする、今より上人在世當時の六百年以前の未開時代に在ては、嘸かし異樣な感を懷かれしならん、殊に相模より陸路山又山の險を過り海邊に出でられし時は、一層深く感せられしと思はる、恰も人間が生れ替りし樣な感がしました、直江津の海岸と相模の海岸とは其の差は大なり、而して海上に於ける波立つ工合、或は樹木の體裁も皆異つて居る、房州や相州は人心浮き立つ樣な感がすれども、佐渡は何となく人心が引き抑へらるゝ樣な感じがする、恰も房州や相州は春の氣候の如く、佐渡は秋の夕暮の如く物淋しき感を生ず、上人の行かれし時は冬の寒き氣候の時なりし故、一層物の哀れを感じられしなるべしと思はる、殊に上人の如き大なる思想を懷かれしお方故、一層大なる感じを懷かれしなるべしと思はる、上人の當時の御遺文を拜讀致しますする時は、上人の當時の事を思はざるを得ないのである、私が彼地にて感せし上に寺泊御書を拜讀致しますれば一層深き感じがする。

私は途中夜明方に長野を通過せし時は非常に愉快を感じました、而し上人が其當時彼地をお通りになりし時は如何樣なりしか、定めし私が通る時の其如くの感はあらざりしならん、即權門の輩より迫害を受け乍ら御通過なされしならん、而るに六百年後の私は何等迫害を受けず安全に而も送迎の禮迄受けて往復した、而し是は一面考ふれば愉快の樣なれど、深く内面に立ち入りて考ふる時は、寧ろ優遇されしを不愉快に思ふ、其故に法華經の行者として之を色讀身讀せば必ず迫害に遇ふと釋尊の敎にの玉はれし、上人は法華經を色讀せる故に斯の如く迫害に遇はれしなり、私は未だ其位置に到らざる故却て優遇せられて愉快を感せしものなり、此の愉快なるものは當分の愉快であつて、所謂法華經色讀の上より出でたる愉快ならざれば、却て私は之を不愉快に思ふのである、餘り前講が長くなりますから此から佐渡を巡拜せし其の概略を申述べる事に致しませう、私は七日の朝新潟を發し、四時間で夷に到着しました、舟にて僅に四時間位で到着し得る距離であります、幸ひ海上も平穩でありましたから航路も安全に到る事を得ました、上人の御流罪當時の道筋とは反對に行きました、私の第一に愉快に感じましたのは土地の信者連に迎へられ太鼓を鳴して七遍返しと云ふ題目を唱へて勇しく迎へられ、其七遍返しの題目と云ふは、波狀形の如く其音聲の高低恰も波の高下の其如く、時には高く又低く珍敷き唱へ節にてありました、之は今でもまだ耳に殘つて居ります、其から塚原の靈蹟に至りました、此處にある三味堂の位置に就いては、

色々の異說あり又御書等に依て實地に調査する所に依れば多少相違し居る樣見受けるのである、此の塚原は有名なる塚原問答のありし所にて、其處には根本寺と云ふ寺がある、此邊一帶は殆ど島を歩いて居る樣な感じはしい、稻も充分生育し居り又此地方は凶年と曰ふ事は殆どなく、爲に秋は澤山なる收穫あると曰ふ、此邊は一般に至る處に醫者として樹木繁茂し、又其樹木は往昔よりの古木の如く思はる、寂しき樣な極て凹地である昔は蛇が澤山居つたと云ふ事で、俗に之を蛇窪と曰ふて居る、而して私の此地に到りしは日沒頃であつた、故に附近の風景よりして一層物淋しく思はれた此處に昔の庵室と思ふ所があつた、成程風雨雪も降り込み電光もさし込みしと思はる、上人は此處にお出になりて「日本第一の富者なり」と曰はれし心中を考へれば、二重三重にも其の心根が察し得らるゝのである、之と同時に塚原問答の歷史が異樣に思はれた、塚原問答には在島の人民のみならず遠く新潟方面の人々も、澤山此地に入り來りて上人を閉口せしむべく集りたのである、乍而之等は却て悉く上人に破られしと御遺文にも見ゆ、此れは單に上人の偉人なりと曰ふ、一語に留め置く事にしよう、私の感じ且つ驚きしは新潟附近の人々の熱心なりしを驚く、現今は汽車汽船あり通行極て便利である、乍而一度佐渡の御靈蹟を巡拜致さうと思ふても中々行き難い、而るに古は不便なるにも拘はらず法敵の上人を害せんとして行つたのである、現今の人々は如何にと曰ふに、只法門の貴さを知つて而も其の遠路をも顧みずして行くと曰ふ勇氣を有しない即ち法の貴さを知て其力を有しないのは念佛者にも劣る、兎に角念佛者等には惡ながらも信じて而も行ふた、私は其の一事は非常に感じた、現今の日蓮主義を信奉する信徒は、一同に斯の如き熱烈なる態度を模倣せん事を望むのである、其の翌日は二里許り隔てたる阿佛房に行きましたが、阿佛房夫婦の墓は樹木茂りし森林の中にある、誰人の城下なりしか不明なれど極て風景絕佳の處である、塚原より阿佛房に到る途中に日朗坂と云ふのがある、又順德院等の三宮の陵がある、一ノ宮

の陵は日郎坂の傍にある、三宮及び二宮の陵墓は皆村名に成て居る、私の阿佛房に着したのは、午前十二時頃でありました、此邊は遊歩に適した土地である、此處には上人の御直筆と稱する本尊がある、此御本尊は筆蹟及び紙質等に就いて見るに實に驚く程の大なる者である、而して紙質は反古紙を貼り合せて作りしものである、此れは疑を容るゝ餘地なしと思はる、筆蹟も極て立派なるものである、其御消息文三通計りは疑なき御眞筆と思はる、尙其他多くの者あり、又日興上人の眞筆もあつた。

阿佛房の本堂は立派に建てられてあつた、祐具の墓あり又熊若丸の墓もある、熊若丸の仇討したと云ふ跡地あれと其實如何にや判然せず、其後方少し斗にて山を越ゆると、順德院の陵に達す、大分高き所に梅と松との森林の中に御陵がある、常には勿論門を閉ぢてある此の御陵の傍の小高き丘に上りてママの入江を見れば、實に佳絕にして歌の一二種も詠せざるを得ない所である。

其處には御馬石御舟石と曰ふのがある、之は順德院の都に御返りにならんと御思召て、馬の代りに其の石に御跨り遊したる石なり、又同じき御志にて舟の形に似たる石に御乘り遊したる故に御舟石と稱するなりと此の附近に神社あり、其の社中には寶物も澤山あると曰ふ、私は其の寶物中拜觀したる者の內で感じたのは順德院の舟遊中に太刀を水中に御落しになりし時詠せられたる一首あり。

つかの間も身をはなたじと思ひしも
浪の底にもさやぬきふらむ

此詠歌の意を伺ひ奉るに、身をはなさずと思ひ居りしに、海中に落したりし時の御感じは如何計りにあらせられしやを察し奉る、寶物拜觀中此の一首にて實に感泣した譯である。

承久三年七月島へ御出になりしなり、御年廿五歲又一說に仁壽三年四月十六日と云ふ、彼地に御出駕なされしは承久三年と云へど、或は其翌年に非ざりしや、若し左すれば在島滿二十ヶ年である、而して何れが眞

なるや定め難いのである、其の御廟より約半道計にて里木の御所に至る、私は時間の都合上中止致しました此の島には三ヶ所里木の御所あると曰ふ事である。

其れより私は一ノ澤に向て出發いたしました、一ノ澤は名の如く小高き處より少し降て行く處であつて、其の小高き處で展望すると四方の風景は甚だ佳良である、此處に於て上人は觀心本尊抄を御著しに成つたのであります、此の處で本尊を御製作に成つたのである其れは七月八日と御記しあり、恰度私の拜見致しました日も矢張七月八日であつて、何となく不思議に思ひました、之より半道計りにて根本寺に到りました、此等の寺々の中で私の思ひ附いた事は、之程の寺で靈蹟保存を計らざりし事である、寺の立派に外觀の美しさはさておき、肝腎の靈寶の保存が完全でないと思ふ、私の考へとしては古の儘でなければ不可であらうと思ふ西洋抔の樣子を聞くと其儘保存してあるそうだ、私ばかりでなく諸君にも上人の靈蹟を巡拜するに當ては、成べく御在世當時と替らざる者を拜觀したき意志を持たるゝであろう、私は勿論御在世當時の其儘の者を拜觀致したかつたのである、之れは私の僻見根性かも知れぬが、兎に角其儘を望むのである、又身延へ行きましても御庵室の處は、高く改造され、又た堂宇を美麗に致したのは可とは思はれぬ、私は餘り寺の高く且つ立派なりしに依て却て不快の念を起した、今回に成て更に深く感じた、即ち道路は堅固に改造せられ、文明の運輸機關は悉く備り、又至る所にて御馳走にもなる私は元來古への有樣を見んとして行きし者故却つて不快を覺えた、然し其も至る所で冷遇せらるれば又格別であるけれど、其も亦却つて優遇を受け益々不快の念を懷いたのである。

其れから一ノ澤から又二里計り行くと相川と云ふ處に行た、此處には金山がある、私は金山を見物した、諸君に關係はないが少し御話し致さうと思ふ、金山の入口は匂配甚だ急であつて、入らんと欲しても容易に入り難き處である、私の見る所坑中より出で來る工夫を見るに、恰も地獄から此世に生き返て來た樣な姿で

ある、即顏色は蒼然として甚だ哀れに見受けた、此の山の深き所は二千尺もあると曰ふ事である、聞く所に依れば工夫の執業時間は八時間であつて、賃金は僅に八十錢内外であるとの事だ、命がけの仕事をして漸く其の位の金を得るのである、其から少し離れた所に遊女町がある、此處は命がけもせずに幾萬と曰ふ大金を取る、僅な距離にて其金を得る所の差は非常なるものである、一般勞働者の賃金は平均約五十錢位だそうだ、而して此の僅少なる賃金を得る勞働者は、進ては國家社會の繁榮を來たす處の者である、此に反して遊女等は社會を毒するものである、世の中は斯の如く生活の狀態が不公平である、此の處に於て苦みを共にし樂を共にするの志なき者は、道德と曰ふ觀念が頭の中に無い者と私は思ふ、餘りに生活の狀態が兩極端に分かれて居る。

其れよりオギに往きました、此處は日朗上人が赦免狀に接して鎌倉に歸らんとせし時、生憎海上風波荒く爲めに船は操縱の自由を失いて此の地に吹き寄せられ辛じて顚覆の難を免れしと此處にて終夜法華經を讀誦しつゝありしと曰ふ、日朗上人の此時の心地や如何計りなりしや、悲觀を懷かれしや否や、然し法華經の行者には諸天善神が加護するとの金言なれば、確信を懷きし所ありしならん、殊に終夜法華經を讀誦し居りしとすれば、悲觀に非らずしてなづ〳〵樂觀の方なるべしと思はる、土民の言に依れば、其の當時近傍の人々相集て上人を保護したりと傳ふ。

相川より舟にて四時間計りにて松ヶ崎に着した、此處は日蓮上人の甫めて御流罪の時御着きなされし處である、上人の御到着なされしは夜間なりしと曰ふ、其の海岸の附近に大なる木あり之を通稱しておけやきと曰ふ、私が實見する所、上人御流罪當時よりの古木に思はる、其れのみならず土民の言に依れば、其の木の下に上人はお腰をお掛けなされしと曰ふ、私は恰度其の時區役所の吏員に出會ひました故、此の樹木は靈蹟の一として然る可く保護しては如何にと質せしに、吏員は近々致す心組なりと答へました、此の邊は一般に

漁家ばかりであります、兎に角今後有志者は佐渡へ御巡拜なさる時は、是非此處を巡拜する必要あり、此處は上人の甫めて御上陸なされし所故一度は拜覽し置く可き事と思ふ、海上風波荒き爲、翌十一日寺泊に着ひた此處にはウスヒヲの水あり、極暑中にも水の乾かぬと曰ふ、然るに惜ひ事には、道路改築の爲に失ふに至つたと曰ふ、此處には上人のみならず、順德院の御滯留遊されし靈蹟であります、其外公卿方の靈蹟もあります、順德院の御詠歌の一首を申しまするならば、『月みても秋のあはれはあるものをしづ心なくうつ衣かな』、其れから寺泊に一泊したのが十一日で、其翌十二日に歸京話しました、話す事柄は極て平凡であるが途中に於ける所感は甚だ多い。

佐渡全島に於ける人氣は惡しくはない、而し相川やオギ等は人々の入り易き所、即交通頻繁なるが爲か稍輕薄の氣味がある、又佐渡と云ふ所には悲しき方面に於ては、順德院あり、又思想上より貴き方面に於ては日蓮上人あり、御南靈御在島當時は勿論淋しき一小島であつたのであらう、現今斯く進步發達せし起因としては、一面御靈蹟の存在よりして今日あるに至つたものであろうと思はれる、又產物としては金山あり、乍而金の出處としては敢て言ふ程でもない、承久の事は話すべからずであるが、佐渡といふ所は名譽にもあるが又歷史上には不可なる所もある、上人御一代の事に就いては佐渡は分離すべからざる所であると思ふ、不思議の事には順德院の承久三年に御着なされず、翌年御着きなされしとすれば、上人と同年にして同地に御出でになされしも不思議と思はる、同じ島に順德院ありて上人あり、今より考察すれば一の靈山なりとも思はる佐渡には物質上に於ては金山あり、航路上の發着所としては相川オギあり、又遊女の場所あり、思想上には順德院あり、而して又日蓮上人あり、尙日蓮上人の御在島間に於ける御狀態は如何樣なりしかは、此の次の時に御話致す心得であります。

「七月二十三日天晴會夏期講習會に於て講演せられたるもの也、次號に本論を掲ぐ、いかに佐渡における上人が無限の光明を放つてわれ等の心性を照し玉ふか、われ等その幸榮を欣んでまさに其敎に憑るべき也、(白碧記)」

日蓮主義綱要

大僧正　本多日生

只今小林先生の御話の如く　聖上陛下御大患にあらせられ、平素宗敎心を有せざる人すら、神佛を念じ感應を仰ぐと云ふ時に當りまして、我等日蓮主義を奉じ正義の信仰を以て集れる者が、法華經に依て御祈願申上ぐるは當然の事と信じまして、今日は講演會の開會に先立つて會員一同至心に御祈願を申上げた次第であります、明日も七時開會の以前三十分を以て御祈念を致さうと思ふので有ります、全般の人々と申すではありませんが、志の有る人は共々に修法に御參列相成る事を御勸め致します、斯の如き會合に依て御祈念申上ぐると云ふ事は、各自に取つても一層信仰を增す機會であると信じます、天晴會は殊に忠君愛國の精神に富める會員を以て成立せるもの、この機會に於て赤誠を發揮するに務めずばなるまいと思ふ、又私は祈念の意義とは經を讀み本尊に向つて合掌禮拜するのみが祈念と云ふに非ずして、日蓮上人が持法華問答抄に

傳敎大師是を講じ給ひしかば、八幡菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人是を讀み給ひしかば、極尾大明神は寒風をふせがせ給ふ

と示されし御趣意の通り、傳敎大師是を講じ給ひしかばとあるによれば、醍醐の法義を講じて、思想を練る事のそれが即ち大祈念となるのである、法華經譬喩品に

我所有福業今世若過世及見佛功德盡回二向佛道一

との聖語が有ります、回向とは自己の成した德を他に向はしむるの意味である、自分の知り居る事を、他に敎ふるも一種の回向である、私は此講演に於て本佛より來れる大功德を諸君に御傳へしようと思ふのであるかゝる意味に於ける講演は、傳敎大師是を講じ給ひしかば八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し給ふと云ふ處より推して、本會の講演が　陛下の御祈念に回向する事が出來ると信ずるのであります。

私の講演は御紹介になりました如く、日蓮主義綱要

と題するのであるが、日蓮主義は廣遠なる意味があるので充分に御話を申上ぐるには容易の事でない、日蓮上人の教義は、實に多方面であるのみならず、上人の六十一年間の御經歷は悉く活ける教訓と云ふべきものである、之を短時間に於て御話すると云ふ事は、極めて至難である、殊に今日では上人の御名の下には哲學上よりも、倫理道德の上よりも、又文學の側からも、社會の側からも、將又宗教の方面からも、研究し敬慕する人々が集つて居るので、この多方面に亘りて、それ〳〵特色を發揮せられて居る、この多方面の研究者が何れも上人の主義人格に依て滿足を表するに至つて居る、倫理上より大觀するも、國民道德上の所論にしても、皆眞理の根元に達して、鞏固なる基礎の上に築かれて居るのである、更に社會上より云へば進歩せる現代をも指導し得るのである。

又人格に現はれし上にても、世の傳記として世人より研究さるゝ上に於て、各階級に通じて滿足を與へて居る、又文學上にては最も力ある文學として歡迎せられて居るので、現時に於ては三文文學或は自然主義、社會主義、皮相の現實主義等の混亂あれども、日蓮上人の如き意志强くして一般人を動かす處の理義あり力ある文學は他に類を見ない、上人の文章の一偈一句を擧げ來るも現今のこれ等の小主義は悉く彈呵せられてしまふものである、又宗教の方面よりは、世界の有らゆる宗教に於て未だ發見せられざる統一神教を顯はし又西洋の宗教に於て苦心する所の神の本體を開顯せられて居る、此れ予の一家言ではない、光輝ある事實である、而して此天晴會は在來の宗派の如き固形せるものに非ずして、各派の上に超然たる精神的正義の團結である、天晴會は個別の宗旨ではない、又單なる宗教でもない一種特色ある結合である。

日蓮上人の御言葉には、人に物を教ゆる事は重き車に油を塗れば廻り易く、舟を水に浮かべて行き易きやうと申されて、深遠なる事を平易に傳ふるのが大切な事でありますが、私も斯くありたいとは希ふて居りますが、中々六ヶ敷い事で、特に私はそろ〳〵とお話する事が出來ない、どうも六か敷なつて來る、然し高遠なる大教を話すのであるから、何とかして解し易き樣に話さうと念じては居ります。

前に云ひし如く、日蓮上人の教義としては、多方面に亘りて研究する事が出來得るが、今は從來の教義の方面を話さうと思ふ、日蓮上人の教義に就ては、八つの心得べき事がある、日蓮宗には之を八個の大事と云ふので、極めて大切の事である、八個の大事とは、五綱三秘と申して、五つの綱格と、三つの秘法とである五個とは弘教の綱格と申して、即ち教を弘むる上に心得べき五個の綱格あるを云ひ、三秘とは、信仰の歸着であつて之に三種の秘法ありとするのである、弘教者の心得が五つと、信仰歸着の要義が三つある、之を八ヶの大事と云ふのである、私は此事を話さんとするのである、それも時間が僅かで、詳しく講ずる譯には行かないのである。

五個と云ふは、教、機、時、國、序、と申して、第一が教の深淺を能く見定むる事である、教なればとて如何なるものにても取り用ふると云ふ事は極めて惡い事で、佛教には、小乘あり、大乘あり、權教、實教、等の區別がある、小を以て大を排し、權を以て實を斥くるが如きは、決してなすべからざる事である、盜人にも三つの理由ありと云ふ、理屈は付け樣に依て、一往は付けられるものであるが、一叩きして見れば分かる、其教の善か、惡か、邪か、正かを明かにするのが即ち教である、若し又國と云ふ考察を離れて、鋼の頭も信心からと云ふ樣になれば、一國の風教を紛亂する事になるのである、此に於て教を立つるには、國家社會に及ぼす利害得失の如何を察し、弊害なく功果の多き教を取るべきである。

第二に機とは、教を受くる人に就て云ふ事で、教が縱令可なるものにしても人の機に適合せざれば、用を爲すものでない、故に人々の性質欲望等を觀察し來つて、其人々に適應する教を尊むべきである、

又第三に時とは一人の見解よりも、全體の如何を考察するので、即ち時代人心の大勢を達觀する必要があ

るのである、一個人には可とするも、時代の大勢に不可ならば、教とするに足らない。

又第四に國に對しては、國の體系あり、歴史あり、故に其國體、歴史、國風、民情、等に適應する教を立つべきである。

第五に序とは教の弘まれる順序にして、淺き教の後に深き教あるは可なり、高遠なる教の後に卑近の教を用ゆるは、不可である、然も深遠なる教の後に劣等なる教を弘むるは、大なる害毒を流すものである、又一度用ひられし教なればとて、或は古へより世に尊重せられし教なればとて、立派なる教の世に流布した以上は、其教の下に伏せねばならん、正教の上位に立たんとせば、流布の前後即ち序を紊だすことがあつてはならぬ、以上は簡略に五綱の意味を述べたのである、此名稱の出處は、御遺文中には何れにあるかと云ふに、此五綱中の二三を分離して説明せるは、御遺文中至るに有るが、五綱を具備して説明せられたるは四ヶ所ある。

一、聖愚問答抄(遺文五七二)
抑も佛法を弘通し、群生を利益せんには先づ教、機、時、國、教法流布の前後を辨ふべきものなり
二、顯謗法抄に曰く(四四七)
第四明行者弘二佛法一用心ト者、夫佛法をひろめんと思はんものは、必ず五義を存して正法を弘むべし、五義と者一者教二者機三者時四者國五者佛法流布の前後なり
三、念佛無間地獄抄(五一二)
加之弘二佛法一輩、教、機、時、國、教法流布の前後可レ檢歟
四、教機時國抄
全抄悉く五綱の順序の説明であるから引文は略する
以上は五綱の名稱具備せるものであるが、或は二綱、或は三綱を説示せられたるは至る處に有つて、特に國に就ては、立正安國論あり、時には撰時抄あり、教に就ては開目抄、報恩抄等があつて、其説明至れり盡せりである。

次に五綱の意義を解釋せば、抑も佛教の教は、極めて多方面であつて、一面には萬世不磨の大眞理を具備して居る、時間を貫き、空間を絶せる、即ち時處位に依て變せざる大覺道であつて、一切の諸佛菩薩も、此の眞理外に出づる事はない、所謂五佛同道の法門と名くる大道である、此界にも、世界にも、十方法界にも遍滿せる眞理である、又他の一面には大小の機根、男女貴賤の思想の差別に對して、機感相應する教も立つて居る、されば佛教は不朽不磨の眞理と時處位に適合する應用とを束ねて一個の統一ある教とするのである、時處位の何れかに對して適應する區々の教は即ち方便である、未來の爲には彌陀を念じ、子供の爲には地藏菩薩を信じて、これが佛教なりと思ふ如きは、佛教に體達し得た者と云ふ事は出來ない、佛教は廣大深遠の大宗教であつて、西洋の哲學にても、東洋の倫理にても、共に包容し統一する力を有つて居る、斯くして尊無過上の權威を占めて居るものである、故に如來の教は、區々の方便の末に執着すべきに非ずして、濶大の包容と嚴然たる統一あることを領悟すべきである、方便の方より云へば、或は彌陀を説くあり、藥師を説くあり、或は哲理、或は道德の一部を説けるもあり、されば多くの經典は、世尊の一場の講話に過ぎざるものが多い、或は賢妻が堅き精神を以て夫を助け、一家の圓滿を計れるを稱讃して説ける教もあり、又長者の娘が嫁入りして、里家の權勢を假りて、舅姑及び夫を輕侮するに對しての不心得を誡むる如き教もある、此等の一部分を取つて、佛教の眞理なりと思ふたならば實に淺薄な教となり、世間の教と何等簡ぶ所もない、否却つて世道人心を害する事にもなる、又矛盾せる説も多くある、爰に於て教相判の必要が生ずる、然るに多くの宗派と稱するものは、唯或る對機適應の一面を取るに限られて居る、例へば眞言宗にしては、大日經を取て華嚴法華を排斥し、念佛にしては彌陀三部經のみを取て他を用ひず、或は顯密二教と立て、或は聖淨二門と分つも、共に一隅の見解に過ぎないのである、其判釋たるや、全く正鵠を逸して居る、人間に對して説

かれた教を顕教と稱して賤み居るが如き、實に笑ふべき判釋と云はざるを得ない、或は聖淨の二門に分ちて聖人の教は尊く勝るゝとも、我等下賤の行ひ得る處にあらずとなし、何者も來れ、如何なる下賤惡人も救ふてやるぞと云ふ易修易行を取ると云ふが、そこに佛教の本義を逸して居る、然し之等も其缺點を云ふ人がなければ、人その非を知らずして過き去るのであるが、日蓮上人の指教によりて其誤解の大なる所以を知つたのである、然も未だ之に執着して、改む能はざる者が多數に存して居る、日蓮上人の教判と云ふは、之を排斥して捨てるのではない、開顕主義統一主義を以てするのである、開顕統一と云ふ事は、例へば網と大網と云ふ如きもので、廣くすれば多數の網の目となり、合する時は一の大網となるのである、此の譬への如く佛教は大網と網目とに依つて成つて居る、廣する時は八萬四千の網目となり、結する時は統一の大主義の大網となるのである、斯かる意味に於て、一代の教相を見れば、只宗教的意義のみに限らない、道德もあり、慈善もあり、時代の科學もある、或は法律も、政治も人生上の有らゆる事相に於て說明しないものはない、故に佛教は人生の外にあるものではない、佛は實に大哲學者であり、又大政治家大教育家大宗教家である、何とも名付くべからざるが故に、世尊と云ひ佛陀と稱し上るのである、大日如來と云ふも彌陀佛と云ふも、一釋迦佛の尊號に外ならぬ。

斯の如く眞の佛教即ち法華經は、宗教を統一するのみに非ずして、道德も統一し科學知識も統一し、人生を導き活社會を化導するのである、之を法華經の俗諦開會と云ふ、俗諦とは人生の事の全般、即ち倫理道德政治法律殖產生活等、現實社會に行はるゝ一切の世間法を云ふのである、而して開會とは、此等の道德も政治も法律も殖產も生活も、人生一切の事相を統一的に指導するのである、日蓮上人が我國に於て大義名分を明かにし、國體の本義を明かにし、我國の天職を光顕せられし如きも、自己の任意の創見ではない、畢竟法華經の妙旨より感孚し來つたのである、佛教は決して

一小部分の教義ではない、聞く人見る人が之を究むることが出來ないで、無理やりに小ならしむるのである。

日蓮上人の見解によれば、佛教は包容的統一的の大宗教大德教である、即ち法華經に此等一切の事を整へてある、法華は大綱を論ずる、爾前の諸經は網目を說明する、皮膚毛綵出在二衆典一とはこの意である、之を法律に譬ふれば憲法は法華なり、他の民法商法の如きは他經なり、一切經中に法華經無からんか、佛教の生命と歸趣とを失ふのである、故に日蓮上人は

一切經中に法華經在しまさずんば天に日月なく
山河に珠なく國に大王なく人に神なからんが如し

と仰せられてある。

第二に機とは、機には善機惡機なり、利機鈍機がある、然し日蓮上人の論ずる機は其等を云ふにあらずして、今の我日本國の機は、方便の教を與ふる機を以て論ずべきでない、中には愚人惡人も無いではないがそれは出來損こないの者である、今の我日本國民は本門の直機であると云ふのである、本門とは、法華經の眞實を說明したる尊無過上の大教に名づくる言葉である此眞實法華の妙教を全國民に與ふべきを主張するのである、直機とは、迂廻に對する言葉で、例へば田舍者が車に乘て淺草から上野迄行かうとする處が、車夫が賃錢を多く取らんか爲に迂廻する、即ち一直線の道を通らずして廻り道をするのである、それも目的地に達すればまだしも、到達せずして放たれる事もある之を迂廻道と云ふのである、他宗の依經は悉く迂廻道である日蓮上人は斯かる意義により機根を論じたので、當世念佛者無間地獄事(縮遺文五百十三頁)に曰く

日本一州不レ似二印度震旦一一向純圓之機也恐如二靈山八年之機一以レ之思レ之淨土三師震旦權大乘機不レ超二於法然一者不レ知二純圓之機純圓之教純圓之國一爲二權大乘一分一觀經等念佛不レ辨二權實一震旦三師之釋以レ之此國令二流布一實機授二權法一純圓國成二權經國一背二醍醐一者與二蘇味一失誠甚多。

この聖語を熟拜すれば大體の會得が出來るのである、

第三に時とは、普通正像末の三時を論ずるが、日蓮

上人の趣意は、今日の時は一面よりは末法澆季の時と云ふが、實は佛法の眞實の教の顯はるべき時とせられるので、最上の法華經を後五百歳に流布すべき時と論定し給ふて居る、彼の法然上人の如きは、末法澆季の時なり大法の弘まる時に非すとせるが、之に反して、日蓮上人は小白法隠沒して大白法の流布すべきとするのである、末法の時として悲觀すれば其弊は多大のものである、彼等消極的の宗教家は大正法を信ずることが難いとするが、日蓮上人は大に之に反對して警誡を與へられたのである、上人は時を知るを大法師となすと仰せられてある、時と云ふは極めて大事なる事であつて時を誤れば萬事成就する事は望まれないのである、例へば物を作るにしても其時を失へば豊かなる收穫は見る事が出來ない、撰時抄に。

註する所機にはよらず時至らざればいかにも說かせ給はず(遺一二九一)

機に隨て法を說くと申すは大なる僻見なり(遺一二〇七)

千經萬論を習學すとも時機相違しぬれば驗なし

是れ上人平素の所論である、又

法華經は一なれども持つ樣時に依て色々なるべし

國に紙充滿せんに皮をはいで何かせん

佛教の實行は時を鑑みねばならぬ、印刷術の進歩せる時勢に小石に經文を寫して、土中に埋めて功德を得ようと思ふ如き、これ則ち時代を知らない者である、斯かる行は已に過去の事である、此等は形式に捕れし宗教家で、日蓮上人は今の教調に於てこの固形する弊害を誡められたのである、

第四に國とは、他宗派に於ては國と教の關係を云はぬ、獨り日蓮上人は布教の最初に之を考察せられて居る、法を弘むるには、第一に我日本國に適する法を選むべしと教へられたのである、宗教にもあれ道德にもあれ、國家を離れてその効果を全ふすることは出來ない、元來人は社會的生存をなすもの、その人を目的として救はんとするには、國家との關係は尤も大切なる教義である、夫獨に非る以上は國を思はぬものはない

が、教は根本の觀察よりして國家に重大なる關係を有し、之が調和を闕られたと云ふ事は實に上人の達觀である。

我國はその國體が世界に卓絶せる國であるとゝもに世界最大の德教の顯發すべき國である、而して國の力と教の力とは因果の關係を以て發展すべきものである佛教は初め震旦朝鮮より渡れども、終には我國に於てその眞意義根本法が闡顯せられて、世界的大德教となつて六合に及ぶべきである、月氏の佛教は東土日本に渡り、東土日本の佛教は世界各國を照すと云ふが、上人の理想、恰も朝日が日本帝國に昇つて世界を照すが如きである、即ち我國光と共に佛教は東土日本より出づべきものなりと上人は確信せられたのである。

第五に序とは、弘教の順序を云ふので、之は我國に佛教の弘まりし有樣に依ても知る事が出來得るのである、始め奈良朝には小乘佛教弘まり、次に權大乘弘まり、次に傳教大師出でゝ法華經の大體を弘め、次第して日蓮上人に至りて統一的大教義を弘め給ふた、即ち小樣迹本との順序になつて居るのである、然し傳教大師迄は、其順序整然として亂れなかつたが、日蓮上人の時には、北條の權勢時代であつて、而もこの大德教を建設する光榮を有しない、身は陪臣にして且つ大義名分をも亂りし者である、こゝに日蓮上人の立正安國論の提出となつたのである。

現時歐米の思想侵入し來りて、我國民が健全なる思想を失ふは殘念の事である、之れ我國に根底ある思想の確信が無いからである、若し國民にして上人の如き大理想を確信するあらば、歐米の思想に接着して動搖するが如きことは決してないのである。

以上は五綱に就ての簡單なる說明であるが、この五綱を領悟して後、始めて日本國に教を弘むる資格がある者となるのである、教機時國抄に

以上の五義を知て佛法を弘めば日本國の國師とも成るべき歟

と仰せられてある、法華經には

於二如來滅後一知二佛所說經因緣及次第一隨レ義如レ實說

と說かれてある、此等の因緣關係を知らずして、敎を叨りに弘むると云ふは、道の爲にも國の爲にも人の爲にも大なる罪惡である、現代の思想統一問題の如き、正しく日蓮の指敎に聽くべきであると信ずる。

こゝに注意すべきは、日蓮上人の國を重んじ給ふに對して、多くの宗敎家は、日蓮主義は國に佞ねるとの誹謗をなすものである、その意は宗敎は人生を超越するが故に其處に國家を見る必要がないとする、日蓮の國家を云ふは淺近の說狹隘の宗敎なりとする、この反對の極端には國を絕對に見て敎を方便に見るものがある、此等は未だ日蓮主義を正當に會得せざるものである、日蓮上人は國と敎とは離るべからずして、敎と國とは共に絕對の意義を有し、而かも兩者適當に調和して相進むものである、即ち上人の國家觀は法華經の眞理より起る、法華經の眞理は絕對、平等は眞理の半面にして、而かも平等が上に直ちに差別常住を說くものである、例へば水と浪との如く、湛然たる水即波である、而も其體同一である、社會は千變萬化窮まりなけれども、その起伏するさゝが常住である、小なる我等にも無限の釋尊の性質を持つて相通ふて居る、有限なる國家の上にも不滅の本體の表現として事々物々深遠な意義を有つて居る、世間即常住である、有限の世界と絕對の本體とは契合一致して居るのである、隨つて宗敎の目的は世間出世を一貫して、國家を保護する上にも、實在不滅の向上にも共に力を盡すべきである、國と法と共に人生の眞善眞美を發揮するとせば、宗敎も亦人生の眞善眞美を完成する上に努力せねばならん、國の理想が國家の事業を擴張し皇室の尊嚴を維持し、內億兆を愛護し外六合に光被するにあらば、我國の宗敎も亦この國家の理想目的を發展するに努めねばならん、國家が國民を保護するは、死後に於ける子孫をも安らかにするので、即ち未來の慰安ともなるのである、宗敎も亦同じく國家を安んじて更に歿後を助けんとするのである、故に法を思ふも國を思ふも、共に一個の大理想界に於て一致するものである。

又日蓮上人の主張は病人が病を奮すとか、老人が未

來の慰安を求むるとか云ふ一部分の爲に敎は存するにあらずして、三世安穩の爲めの敎である、法華經は死後のみの敎ではない、又子供には地藏樣、眼病には藥師樣だと云ふが如き敎でもない、法華經に依て有ゆる理想の滿足を得らるゝのである、故に此理想を捨てゝこの理想を導びく敎を去るのは謗法の邪國となるのである、謗法の國は久しからずして亡ぶと云ふが、若し國にして理想目的なく、又之を導びく德敎感化なく、紛々として思想の亂るゝに任かさば、必すその國は亡ぶべきである。

法華經の大敎義を神會せる上人は、法と國とを二分しない、若しも法と國とを各別に見るならば、一ッの身心を二分するが如くである、理想や敎を捨てゝ國家萬能を思ふは不可である、國家を忘れて理想や敎に囚はるゝも亦大なる迷見である、國と敎とに對する信仰道念の一致を自己に決定し得ない程の苦しみは他にあるまいと思ふ、幸にも日蓮上人は、深遠なる根底よりして敎法と我國家との調和を論じて、立正安國の大義を絕叫し給ふたのである、曾谷抄に此調和合體する事を悟つた時の御悅びを、「兩眼澤の如し」と仰せられて居る、國を思ふ精神と法を思ふ精神とが妙合したる時の喜びを言ひ顯されたのである、されば法と國とを分離し、法のみを絕對超勝と思ふて國家を遺却する如きは斷じて上人の御本旨でない、暫くとも日蓮上人の御本意を知らんと思はゞ、國と法との相互の絕對と兩者の調和を求め、自得するまで研究を進めねばならんのである、之に依て立正安國論には

夫國依(レテ)法(ニ)而昌法因(ヘテ)人(ニ)而貴(シ)

三秘抄には

王法冥(シ)ニ佛法(ニ)佛法合(シテ)ニ王法(ニ)

王法佛法冥合して立正安國の大義を發揭すべしとの御主意である、これ日蓮主義者の眷々服膺して感くその德を一にすべき大事なりと信ずるのであります。

本講演は七月二十三日天晴會夏期講習に於て二百餘名の講習生に對し熱烈なる態度を以て大主義の綱要を講演せられたる者也その三秘の說明は次號に揭げて讀者の信念倍增の資に供せむ(白碧生記)

海外の發展を望む

海軍大佐　佐藤鐵太郎

今日は斯く大勢の御集りの場合に於て、殊に各方面の方々の御面前に於て、私の所信を述ぶることを得るは無上の幸榮とする所であります。

天皇陛下の御違例の事を拜承致しました以來、何となくヲメ〳〵した濃霧の裡を航海して居るが如く不安に感じまして、唯だ〳〵不安の念危懼の思に鎖されて居りましたが、追々と御順境に向はせらるゝと云ふ事を拜承致しましても、心中何となく一種の勇みを感ずる次第であります、何うか一時も早く御全快遊ばしまして、我等臣民をして神々敷龍顏を拜せらるゝことを得せしめ賜はらん事を禱る次第であります。御仁德深く高くあせらるゝ陛下は、必ず我等臣民の祈願を受けさせられ、速に御回春遊され、我々臣民をして朗かな春の日の如き嬉しさを感せしめらるゝであらうと信ずるのであります。

乍恐天皇陛下は顯神であらせられ、皇祖天照大御神の御神靈を御體顯遊されて御出遊ばすのであります、言葉を換て申さゞれば、天皇陛下の御體は則ち是れ天照大神の御神體であらせるゝのであります、我々の祈願する所は、唯だ〳〵天皇陛下が我々臣民を御憐み下されて、一日も早く御本復遊さるゝ樣に願度と存じまして天皇陛下に御祈願申上ぐるのであります。

古の歷史を拜しますと、天照皇大神は素盞男尊の無道なる有樣を御厭ひ遊ばし天の嚴戸に御隱れ遊ばされ、天地晦冥となり其時の臣民は恐懼の念に堪へず、之を天地の神祇に訴へ神樂を奏して御神慮を御慰め申上げ、漸くにして御勅許を蒙り再び天日を拜する事になつたのであります、今日を以て考へますに其時も嘗かし今日の如きものであつたであろう、天皇陛下の御違例に對し奉り我等臣民の恐懼措かざる所以は玉體の御惱みは我々臣民の所爲の爲である、如來の御疾は大悲を以て起るのである、一切衆生の病の爲に病ませらるゝのであるいどうぞ是より悔ひ改めて正道を守り再び惡道に墮するが如きことは誓て致しませぬ故どうぞ直に御直り遊ばして一日も早く麗しき龍顏を拜させ賜へと祈願致したならば、天皇陛下に於せられても嘗かし御嬉しく思召され、速かに御快癒遊され我等臣民をして安堵の思をなさしめらるゝであらうと思ます。

餘りに神秘的な思想の樣ではありますが、私の信ずる所は實に如斯であります、陛下の御惱みは我々臣民の爲の御惱みである、我々臣民の事を御軫念遊されての御不例であらせらるゝのである、如斯思ひまするに付ても吾々臣民は實に恐懼に堪ざる次第であります。

近年に至りまして箇人主義自然主義、社會主義物質主義の如き過りたる思想や、心に何等の信念がなく善良なる理想を確立する事能はずして、フラ〳〵する樣な思想が世の中に充滿致しまして、世の思想界は混沌たる有樣であります、加之此等の惡思想は未來の經綸者なる青年の心に喰ひ込み、動もすれば驚くべき體度を採るものすらあるに至つたのであります、殊に憂ふべきは世の一種の思想に捉はれたる學者教育家が、高尚なる宗教的信念をすらも迷信と考へ、道德倫理を以て人心を整へ得ものと速斷して仕舞ひ、國民の宗教的觀念を打破せんとするが如き自稱先覺者あるに至つたのであります、殊に人間として最も賤しむべき毒思想を以て國民の觀念を動搖せしむるが如き操觚家もあり、學問の皮に隱れ惡むべき毒矢を放て我國民の胸を突き破る學者もあります、動もすれば人間の道德は箇人と家庭と社會と國家と宇宙とを一貫して喪はざるものでなければならぬのに、唯だ〳〵其兩端たる箇人と宇宙、而かも謬りたる宇宙觀を結びつけて得々たる思想家もあるのであります、全體國民として第一に大切なるは國民としての堅實なることであります、國家の天職に對する自覺であります、然るにも關はらず散漫なる惡思想に捉はれて、動もすればこの根本を咒はんとする者すらあるに至つたのであります、日蓮上人の御言葉を以て天皇陛下の大御心を御推察申上ぐるは何となく不安の如く感じまするが、日蓮上人の御言葉に『鳥と獸とは鳴けども涙なし日蓮は泣かねども涙ひさ

なしこの涙は偏に法華經の爲なりと仰られたのでありますが、乍恐斯かる混沌たる現時の有樣を御覽遊されては、御叡慮を勞せられ賜はせられると如何計りであらせられましようか、議會に下されました御勅語を拜し奉つても、世の風敎の廢れ行くを御軫念あらせられる御樣子を拜することが出來るのであります。

實に陛下の御不例は衆生の爲の御不例であらせられるので、世の敎育家が神と人とを信仰にて結びつける宗敎を以て敎育と沒交渉のものと速斷し、宗敎を以て迷信となし動もすれば、動もすればでありません、力を極めて未來の日本國民に宗敎心を起させない樣に致したのであります、之は決して惡い心ではありませんが、日本國の眞の意義を悟らざる一部の學者が、一も二もなく西洋の物質的思想を輸入して其れをオーソリテーとして之を日本に植たのであります、私は日本國民の目下の第一の缺點は思想界の混亂であるので、日本國民の思想の根本義に對する確信の動搖にあるであろうと思ふのであります。

此點から考へて見ますると、陛下此度の御大患は、我等臣民に對せらるゝ難有き大悲心の爲であらせられるのである、如何に物質萬能の學者でも、如何に神佛禮拜を以て迷信なりと罵倒する思想家でも、此度の御大患の報を得て神に禱らぬ人はありましようか、佛に祈願を籠めぬ人はありましようか、私は或小集會の折に神佛を信じない人は人生の眞の意味を知らない爲である、若し其人を生死の界に身にせまる一大事に逢はせたならば、乾度從來の理屈を捨てゝ神前に默禱するに至るであろう、朝飯前の道德は理性の發達のみを以て之を進めることは出來るが、一大事となつては到底情操の動き信仰の力を以てゝなければ一抄間も安處する譯には行くまいと申した事があります、今度こそは如何なる人と雖、天皇陛下の御製の

目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけん

と御詠遊されました大御心を拜察し奉る事が出來るであろうと信じます、實に此度の御大患は我々臣民へ下し賜はつた大詔勅で實に難有い御詔勅であります。

それにつけても法華經壽量品を思ひ起さずには居られませんで、壽量品には、良醫と毒藥を飲だ子供の譬があります、子供をして自分等の飲だのは毒藥である、父上から下された良藥を飲まなければならぬと云ふ事を悟らせる爲に、種々の方便を以て小供の心に大覺醒を與へられたと云ふ譬諭があります、乍恐陛下の御不例は敬神の念なき學者をして、不知不識神前に拜伏するの心を生せしめたであらうと、この大覺醒の爲に世の思想界は堅實なる信念の上に立つに至るであらうと、我等國民にして此大覺醒を致したる以上は、我陛下の御惱は速に御回春遊さるゝであらうと私は信じます、如何に蒙昧なる如何に頑冥なる思想に捉はれたる人と雖、此度の御大患に際し、誠心より神祐を願ひ奉らざるものは我日本には一人もなからうと思ひます、此大悲の御靈德を身に沁みて拜せぬものはなからうと思ひます。

以上申上げました所は、今日の私の演題には沒交渉の樣ではあるが、海外發展の大事業は、實に我國民の誠實なる自覺の上に右に述たる如き眞率なる情操の働きを要求するのであります、物質的觀念を以ては利害の問題に關し相當の判斷を與へることが出來るであらうが、堅實なる基礎の上に立派なる國民性を樹立し千萬歲に變りなき海外發展を望む譯には參らぬのであります。

精神的海外發展の事に就ては、昨夜も本多大僧正より御講演あらせられたる如く、佛敎は朝日の昇るが如く東土の日本を出でゝ西方を照すべきは我日本國の天職として自明の事であります、如何に疑を挿みても王佛冥合の日本にあらざれば此の大なる天職を行ふべき國はないのである、敎は世界的で國家は分立的であり、思想は家族的若くは箇人的であると云ふ樣な種々雜多の意味を石瓦を混じたる如き有樣に混淆したる國柄では、到底この大なる天職を行ふべきは資格がないのである、王法は無始無終の御皇統を中心として行はれ、佛法は無始無終の本佛を中心として統一せられ、其思想は絕

對位に向て無上の敬虔の心を捧ぐるに依て一貫せられ、我日本國にあらざれば、決して此の絶大なる天職を行ふべき資格がないのであります、日持上人が海外布教の爲に勇しき志を起されました事蹟の如きは最も注意すべきことで、日持上人の海外布教は、決して他の教徒の海外布教と同一に視るべき者ではありません、基督教の牧師が基督教の爲、マホメットの宣教師がマホメット教の爲に外國の布教に盡瘁するのは、其教の爲め其思想を讃めんが爲めの布教であるが、日持上人の布教は是とは少しく意義を異にして居るのであります、則一向純圓の機たる我日本、王佛冥合の我日本、閻浮提第一の本尊を立つべき我日本、即或る神秘的なる觀念より見るも、亦我日本の靈的自覺より見るも、世界を擧げて遵奉せなければならぬ大なる教は我日本を中心として四方に光被せなければならぬので、日本は決して東洋の一隅にある日本にあらずして精神的に全世界を統一すべき天職を有する日本であるとの意義を充分に信じたる爲の海外發展で、つまり此の精神的統一事業の實施に外ならぬと私は信ずるのであります、我國民としての海外發展もやはり之れと同樣で、決して此の小なる日本を大ならしめんが爲の事業ではなく、我日本の天職の命ずる所の事業の發展の爲であると云ふ大意義を忘れてはならぬのであると私は信ずるのであります、日蓮上人は明白に大日本と小日本との意義を區別せられて居らるるので、日蓮上人は此日本の國土をば小なる日本として仰せられて居らるゝのであります、僅かの小島などゝ仰せられたるが如きは則之であります、今去我日本の存在の意義は其發動の精神等より觀察せられたる場合に於ては明かに大日本として賛嘆の意を表せらるゝので、小蒙古御書などでは此御主張が明白に拜せらるゝのであります、則日持上人の事業は此大日本の活動であるのであるので、私が今こゝに海外發展と申しまするのは矢張りこの大日本の活動の意味であるのであります、決して他の國の海外發展の意義とは同一ではないのであります。

(五)世界的大國とし[illegible]何に致せ、我大日本帝國の天職は、所念祭の祝詞に

(七)海外發展と五個の要綱

も明白なる如く極めて明瞭であります、而して此御宣言は決して秦の始皇帝が萬世一系を唱へたるが如きものではありませんで、嚴然たる基礎の上に建てられたる天來の任務であります、此點に關しては今茲に詳しく申上べき時間を持たぬのでありますが、我日本は他の諸國と其存在の意義を異にして居るのは無論であるのので、如何にしても世界的觀念を以て進まなければならんのであります、其れと同時に先第一に世界的大國として嚴存するの必要を認むるのであります。

昨夜本多上人の御演說にも日蓮主義の綱格として御述べ上ましたる中に、教機時國序の五ツに就て御說明がありましたのでありますが、私の海外發展に關する意見も矢張り五綱に契はなければならんので、ツマリ此の五ツを具備せなければ完全の發展を遂げ得ぬと思ふのであります、併し之に就て申上るのは時間の都合もありませんので、私は之には關係せず先づ大體斯う云ふ順序に申上げたいと存じます。

(一)海外發展は最も眞率にして堅實なる意氣込を以てせざるべからず

(二)海上發展に成功せざれば世界的大國たること能はず

(三)海上に國するにあらざれば永遠に世界的大國たること能はず

(四)海外發展は天府の拓發を以て主眼となさゞるべからず

(五)海外發展は國民思想の陶化作用を顧慮せざるべからず

先づ第一に海外の發展は、最も眞率で堅實な意氣込を以てせなければならぬので、少しでも難を避けて易きに就くと云ふ樣な事はなるまいと思ひます、又全國民一致して同一の根本思想より此目的に向て進まなければなるまいと思ふのであります、少なくとも相當の決心を以て進まなければならんので、あれは宜しいあれは宜しくないと云ふ事は勿論決めなければなりませんが、一度び決定した以上は困難を恐れずに之を貫徹するの決心がなければいけません。

海外發展と云ふことは、書て見れば一寸四字云ふて見ればタッタ一言ではあるが、中々に容易なことではありませぬ、現在の世界の各國中で、最もよく海外發展の事業に成功致したのは英國であるが、英國人が今日の繁榮を造り揚げたる苦心や努力は決して並大抵のことではありませぬ、第一其意氣込の强いのは敬服の外なかつたのであります、先第一に英國は海外發展を萬年不變の國是と定め、此目的の爲には如何なる事をも避けぬのであります、之が爲世界を敵として戰ふことを避けないのであつたのであります、太閤秀吉が富士川の戰に伊東日向守を討ちました時に、伊東日向守の立派なる武者振に敬服して到底自分の敵ではないとは思ひましたが、若し伊東日向守から斬り殺さるゝ樣な不運なことでは、自分の運命は誰かに殺されて仕舞ふと云ふことに極まつて居るので到底名を天下に擧ぐる譯には參らぬ、若し自分が名を天下に擧げる樣に出來て居るならば一日向守は決して畏るゝに足らんと云ふて、サヒ槍をつけてトウ〳〵首を揚げたと云ふことであるが、歐羅巴の西の片隅の小島の英國が、全歐洲を敵としても此目的を貫徹せんと致しました意氣込は、誠に壯快の極とより外申すことが出來ませぬ、之が爲英人は百有餘回の戰爭をなし、トウ〳〵其領地の何れにか太陽を見ざることがないと云ふ風に世界の各地に殖民地を有し、遺憾なく海外發展の目的を達したのであります、人によりましては日清日露の兩戰役を以て世界の第一等國を以て自任する迄に日本國自身の地位を高めた樣に思ひますが、唯だ僅かに一回や二回の戰爭では中々そうは行かぬのであります、何うしても後來幾多の國難に出逢ひ彌苦んで彌闘むと云ふ風でなければいけぬので、前途は中々遼遠であると思はんければならぬと思ふのであります、決して色々の御宗旨を惡く云ふのではありませんが、他力專念の心懸けを以て往生安養國に行かうと云ふ樣な心持では疑もなく落第であります、極樂は決してそんなことで行ける國ではないのであります、如何に行き度ひ〳〵と思ふても相當の努力を以てせず

して行く譯には參りませぬ、一寸私が東京から横濱に參りまするのでも、諸君が御宅より統一閣へ御出でになりますのでも、皆相當の努力則ち自力が必要なのであります、今私は此處で辯じて居つて諸君は耳で聽きまして本るので、獨り私が勞して諸君は樂な樣であるが一ッ諸君の耳の勤務報告を御取寄せになりましたならば、其の忙しさはどんなであがましようか、鼓膜の運動は兎も角一々之を腦髓にうけて其を判斷すると云ふ風に、其間の交渉の忙しさは並大抵の事ではありません、極樂世界を夢に見る位の事はそんなに奮發せんでも運がよくば見る事があるかも知れませんが、實際に極樂往生をするのに唯だ〳〵阿彌陀樣に計り頼よつても、自分でそれだけのことをせないで濟むと云ふ譯はないのであります、例へば極樂に參りましても同じ立派なフロックコートに高帽で園遊會に出ましても、其フロックコートや高帽は自分の努力の結果でなく、人の物を胡魔化して來たとか或は盜んで來たと云ふ風に不良の事をやつた結果であるとか、或は道に落て居たのを拾て來たと云ふ風では、同じフロックを着ても到底安心して居る譯には參らんのであります、之と同樣に如何に阿彌陀樣に御願申上げてフロックコートを着て見ましても、そんなに條件附の者では少しも樂しい事はない筈であります、此點になりますると、日蓮上人が法貴きが故に人貴し人貴きが故に處貴しと仰せられたる如く、誠の道を進めばこそ其人は貴いのので、其人が貴ければ假令どんな處でも極樂淨土である寂光の都であると云ふ風でなければなりませぬ、海外發展の事に就きましても之と同樣で、海外發展の誠の道を講じてこそ眞正に海外發展も出來るので、單に利益を獨りで占めたいどうぞ願ひの叶ふ樣にと云ふて阿彌陀樣に願ふ樣なことではいけませぬ、よく〳〵研究して之でなければならぬと云ふ點に對し、斷乎たる決心を以て努力に努力を重ね立派なる海外發展的體度を整へてかゝらなければならぬ、既に決心が如斯堅固に定つた以上は、更に一層の向上を要するのは其意味で亦一層峻烈となるのである、此志さへ確定した以

上は成敗は問ふ所でない、斯の道を踏んが爲の南無妙法蓮華經である、彌陀の本願は無限大である我々衆生を濟ふ爲の弘誓の船は大きいので、假令如何なる罪障があつても沈むことがないと云ふて、ボロ〳〵した穢ない乞食見た樣な人が滿載されて極樂淨土に押しかけると云ふのではいけない、立派なる金色の如何にも美しい人々が乘て、則一乘の大船が滿帆に風を受けて波を蹴ると云ふ活き〳〵したものでなければいけない、則我々の望む所は正しき道を辿り正しき信念を養ふにあるので、不充分ではありましようがどうぞ我慢をして連れて行つて頂きたいと云ふ樣な女らしきものではいけない、我々の努力は立派に寂光土より招待狀を受け諸天善神は蓋を指し旗を上げて我等を守護し、慥かに寂光の寶刹へと云ふ風にして寂光の都に走らんが爲である、普賢經の設へ地獄に墮て無量の苦を受くとも終に諸佛の正法を毀誇せぬと云ふのは誠に以て立派なる決心である、海外發展は要するに如斯意氣込でなければいけないのであらうと信ずるのであります。

(4) 海外發展と西の突端

海外發展はどうしても如斯意氣込でなければ成功の望がない、或は僥倖に成功してもそれは朝の露湯の煙りの如きものであります、併し海外發展と云ふことは果して何人でも如何なる國でも出來るものでありましようか、それは一時はどんな人でも運次第で金持にもなる如く、一時は幸運に乘じて成功する事もあるでありましようが、果じて永遠に目的を貫き永遠に之を維持する事が出來るであらうか、玉椿や南國は立派な相撲である、併し横綱には無理である、小常陸は如何にも勉强で如何にも積極的で氣味のよい相撲取ではあるが、果して大關になり得るのであらうか、之はどうしても先天的の資格が許さない、一時奮闘の結果殆んどロギッケル事はあります、必竟如何と顧みて見ますれば、どうしてもそう云ふ譯には參らぬのであります、海外發展も矢張その通りで、國々の先天的資格の爲にどうしてもそう云ふ風には參らぬのであります。

餘り強言めいて恐縮ではありますが、獨逸の目下の有樣は實に以て素晴しいものであります、殊に海上

事業の發達は惧るべきものであります、獨逸は果して英國を壓倒して海上の横綱となり得るであらうか、佛國の二の舞を英國に對してやるものでなかろうか、佛蘭西の「ルイス」十四世十五世は、海外發展でなければ到底世界的大國たるべき資格がないと云ふ事を感得せられたので、先づ英國を取らなければならぬと云ふ決心を立てられたのであります、當時の歷史を調べて見ますと誠に目覺ましきものであつたのであります、佛蘭西は古來の歷史の證明する如く永遠に世界的大國たるべき資格がない、さらばなぜ資格がない、大陸國であるから資格がない、如何に熱心に英國に對する海上の兵力を擴張しようと思ふても、そんなに獨り相撲を取る譯には行かんのであります、そこで英國の方では陰に陽に他の大陸國と協同して佛蘭西の背後を冒かさせるので、佛蘭西は自分の國を守る爲にどうしても莫大な陸軍を備へなければならぬ、莫大な陸軍を備ると自然の結果として海の方から幾分か力を拔かなければなりません、然るに對手方の英國では舉國一致して唯だ海上の兵力を完整しようとするので、分れて二ッとなるものは合して一となるものに叶はぬ道理でトウ〳〵悲慘なる最後を示すのであります、獨逸の運命は我々如きもの、評する所ではありませんが、若し英國の慣用政策の如く他の大陸國を使嗾し、他の大陸國が眞率に獨逸の背後を壓迫するが如き體度に出でたならば、獨逸は海軍に力を用ふる事をやめて陸方面に力を盡さなければなりませんので、到底英國が其全力を以て完整する海軍に抗する事が出來なくなるであらうと思ふのであります、從て海上發展の海外發展の目的は到底之を果すことが出來ずして、ツマリは如斯英國の横綱を認るであらうと思ふのであります。

大陸國の到底世界的大國として永く存在すること能はざるは歷史上明かなことで、凡そ如何なる時勢でも海上に發展せずに世界的大國となること能はざるは疑もなき事であります、假令大陸に於て大なる發展をやつてもそれはやはり一部分に局限せらるゝので、到底世界的と云ふ譯には行きませんのであります、そこで

古來の雄圖は何時でも世界的發展をなさんがためには海上の發展を企てるので、海上發展に成功したる大國はいつでも世界的大國として富强を致すのであるが、大陸を本國とする場合にはいつでも前に述べた樣子になつて仕舞う、一方にのみ力を盡す譯には參ぬので、ツマリは國防のためには陸軍、外國發展のためには海軍と云ふことになつて兩天秤をかけなければならぬので、終には海上一方の國から壓力を受けて衰退に赴くのであります、此の道理が海外發展上最も注意すべきところで、海外發展の第一義は實に此の點にあるのでありますから、この第一義にして不完全でありまする以上は、如何なる方便を以ても永久的に確固たる海外事業を行ふ譯には參らぬのであります、幸ひ英國と日本國と米國とはこの第一義の意味を備へて居りまするので、この點に注意すると同時に、前にも述べました通りの意氣込を以て進みましたならば後日の大成功は疑もないことであります、英國があれ丈の大版圖を有しあの樣に大陸の强國に近く位地を占めて居りながら、本國防衛の爲には極めて極めて少數の兵力丁度我が日本の半分の兵力を以て滿足し得られ、また米國があの樣な大國で居りながら我が日本國の四分の一の兵力を以つて安全に國防の任務を盡して居るなどは、如何にするも幸福なる國民とせなければならぬのであります、而して海外事業に全力を注ぐで本國の防衛の爲めに其力を減するが如き必要を認めぬのは誠に幸福至極なことであります、我日本國の如きも亦同樣の資格を以て居りまするので、即ち海外發展の第一義に合格致すべき國で、この點から見ても月氏震旦に跨へ八萬の國にも優りたる國格を備へて居るのであります。

(二)

日持上人の海外布敎の如きは、つまり海外發展の意味合に相違ありませぬので、日持上人の海外布敎を企てられたのも決して他の佛敎徒マホメット敎徒基督敎徒などが、世界の各方面に布敎を試みると同一の意味合ではなく、更に眞率なる理由によるのであります、則我日本國は日蓮上人の言葉の如く、一向純圓の機で閻浮提第一の本尊を立つべき資格のある御國で、月氏震旦其他の餘處の國々の到底及ばざる靈格を備へて居る國であるので、佛敎宣布の本源たるべき資格を圓滿に具足して居るから、我日本國を中心として布敎を開始するのは法華經の行者の天職であると自覺されたる結果に外ならぬと確信する、即ち今私が海外發展に關する卑見を述べまするのも、日本國は實に世界第一の第一義性、之を妙な言葉であるとするが第一義を具備する國柄であるから、何に致せ海外發展と申しました所が唯だ漠然と致した理由から結構であると云ふて讃める譯には行かぬが第一に海外發展の資格あるや否や、之は我日本が世界的大國として永遠に存在すべき特異の賦性を有する國柄で進んで海外に發展を試むるも退て國土を守るにも、共に海上の兵力の作用に因ることが出來ると云ふ特異なる長所を有する國柄であるので、資格上の問題の點は優等であります、それから又第二の資格は、國民性の優良なることであります、若しこの點に不滿足であるとすれば、多くの人口を有する國若くは比較的に開明なる國に向て發展するのは、他を征服せんとして反て敵に征伏せられんとするもので、之が爲國民の品性の墮落を誘ふ如き有樣となるのであるから、我國體に合せざる寧ろ我國體を危ふするが如き思想を有する國に對しては、不成國民性の感動を受ざる如く發展の方法を講せなければなるまいと思ふのであります、例へば朝鮮の如き滿洲の如き一舉三千萬以上の人口を增加したるが如き實際となつたのであるが、若し事大主義や革命主義其儘に我國民の間に這入つたならば、それこそ實に一大事でありますので、此邊の處は一層に注意を加なければなるまいと思ふのであります、つまり家道の第一は惡病を持て居る人と結婚するが如きことがありますので、何よりも大切な國民性を墮落せしめはせぬかと思ふ樣な思想を有する國民の居住地に向て、領地上の發展を行ふと云ふことは大に注意を要することゝ信ずるのであります、如何に發展がよいと云ふてもこう云ふ事をも考へなければいけません、他の

國の樣に一時繁榮になれば先づそれで宜しいどんな國でも永久と云ふ譯には行かぬいつか一度は亡びるのだと云ふ考への國民ならば、この點に關する注意の眞率なるを要せぬこともあるであらうが、我日本國は永久と云ふことが何よりも大切で、決して亡滅と云ふ事を許さぬ國であります以上は、假令一時は之が爲に世界第一の大國となつてもそれは反て不祥であります、如何に他の諸國の爲に宜い方針でも日本國にもよいと云ふ譯には參りません、日蓮上人が彼の國に好かりし法なれば此國にも好かるべしと思ふべからず云ふのが矢張り之等の事を仰せられたので、西洋の思想に溺るるの愚を敎へられたのであります、それから又平和的の海外發展の上に就ては色々と注意しなければならない事が多いのでありますが、到底こゝに述べ盡す譯には行きませんので、唯だ一つ私が先年遠洋航海の節、布哇で見聞致した事に就て一つの事實を申上げて見ようと思ふ、全體布哇群島は日本人の出稼地として最も古い處でありますので、所謂元年者と云ふて明治元年の頃に出稼人として渡航致したものがあるのであります、海外發展の爲には國民の資格が何よりも大切でありますが、併しその方法も亦決して之に劣らぬ程大切であります、布哇には四十餘年間出稼人が參りまして、その間に致しました事業は莫大なものでありました、既に此頃になりましては一年に八千萬圓と云ふ巨額の砂糖が出るのでありますが、之は悉く日本人の力であります、私が布哇に參つたとき如何に御奉公に色々の方法があるとしても、天地に對する御奉公は汗と泥とを以て人の爲に必要な品を造り出す程尊い事はない、假令入り高が少なくともそれは皆天地に對し御貸し申して居るのである、勞力が少くて高い給金は天地に對し借金をする樣なもので、勞力が高くてそれに相當の給金を貰はぬのは天地に對して御金を貸すので、必ずその報ひが後日になつて來る、若し自分に來なければ御國の爲となつて顯はれて來ると云ふたことがありますが、布哇に於ける我出稼人の事業の如きは實に神聖な立派なものであります、併しそれにも關せ

す今日迄始んど一人として成功したと云ふものがないのはどう云ふ譯でありましようか、この問題は隨分興味ある問題でありますが、其答は私の考によれば極めて簡單であります、日本の布哇出稼は決して四十餘年と云ふのではなく何年經つても矢張三年と云ふので、この三年を他の人によりて繰り返されて居ると云ふに過ぎぬのでありますから、何つになつてもやり直しと同樣であります、若し我國人がこの出稼を致して居りまする以上は決して成功する事はない、どうしても其國に土着する積りで其國を富ましながら自分も富むと云ふ風でなければいけないのであります、早い話が丁度他人の所に婿養子に參る樣なもので、若し永く其家の人となる積でない時は到底其家に權力を持つ譯には參りません、之を幾らか宛金を貯めてそれを實家に送ると云ふ事では到底折合のよく參るべき理由がないので、年期奉公の心得では決して成功することが出來ぬのであります、布哇の日本人は則之であるので、此風が直らなければ到底海外發展の目的を徹する譯には參りません、日本人はどうしても世界の各方面に發展し到る處大なる幸福を受け大なる活動を爲さなければなりません、何も少しの金を本國に送らずとも其永住地を定めてその處を巨萬の富をなしさへすれば宜しいので、到る處成功せる日本人を以て充されて居ると云ふのが海外發展と云ふものであると私は信ずるのであります、晩はもう時間もありませんからまゆ

に御話し申上ぐることに致します。

七月廿三日天晴會夏期講習會における講演速記號

順次本論を掲げて發展主義の眞髓を傳へむ

（白碧生）

折伏餘論

△『聖書の研究』内村鑑三氏の主管雑誌である、其八月號に載せてある内村氏の説に曰く、「神は人類の父なりと云ふ熱り神は人類を作り給へり其意味に於て彼は彼等の父なり然れども人類は神に反きたり而して子たる其權利を失へり其意味に於て神は今人類の父にあらざるなり眞正の意味に於て神の子は唯一人ありしのみイエスキリスト是なり而して彼に由りて人は再び神の子たるを得るなり」と、内村氏の言ふが如くんば、吾人は神に造られ神の子であつたのだが、或機會に誘れて神の意に反いている〳〵の罪を犯したので神の子たるの權利を失なつたと云ふ事である、されば現在の吾人は神の子でないと云ふ事は確かである、神の子でない、あゝ何たる幸であらう思へ返せば、自分の子であるものが惡魔に誘はれて罪を犯すに何等の注意をも與へないで、權利を失はしめたるなどは神の御心とも思はれない、慈悲も權威もない神樣ではないか、這んな神樣に縋り付いたからとて人生最後の頼み甲斐があらう筈がない、是は冷評でない、内村氏の所論が信すべき者とするならば即基督教の根本教義に於てかゝる斷案が與へられて居ると云べきである、今の世の基督教が金の力により人の目に見へる社會の各事業に手を出して居るのを、お芽出度がつて文明の宗教だなどと言つて居るが、已に造られた人間が子たるの權利を失つて神より見離された以上は、神と人との觸接交通は絶へたので神人一體の教義は成立しない事になる從て信仰の本義は其根本に於て亡びたるもので、こゝに失權の子たる現在の人間がいかに救へよ慕めよと祈禱を捧げたからとて、そこに温かき父子的意義の感應道交があらう筈がない、何ほさて危殆なる基礎の上に立つて居る基督教の信仰ではないか、又『吾等は再びキリストにより神の子たるを得べし』と言つて居るが、始めより意地惡く見離した神の父に縋り申して、意氣のない哀音の祈禱に頭を垂れて殊勝らしくなるよりも、一切世間の人間は久遠劫來救濟の大慈悲を垂れ給ふ毎自作惡念の本佛を仰いで、堂々として元氣よく自我佛性の開發に努めよ、何も有耶無耶の妄想の網にひつかゝつてうるたへるには及ない、

△彗星(八月號)全篇八十頁を通讀し來ると、些に佛陀の教世と云ひ如來の大悲と叫び宗教的人格の偉力を論じて居るが、其全篇を通讀して見ると、慈悲救濟の佛陀格とは釋迦牟尼を指したのでなく阿彌陀佛であると云ふ結論になつて居る、が而し釋迦牟尼中心論を排して彌陀と現世人生との交渉ありと云ふ論據は何れの教相にあるであろうか、佛說中何れの經典に說明し得るであろうか、何んと一代の教說を系統的に觀るの眼識のないのには呆れて物が言へない、否寧ろ慈笑に堪へない、佛教徒にして釋尊を侮蔑するの觀念は、佛身觀上の僧系にして正しく異端と稱すべきである彼等は時に釋迦彌陀一體論を唱へて其の批難を避けんと試みるも、元來三身即一の見地より一體を理想したるものでない、單に法身平等論に逃れて一時を糊塗するものであつて、彌陀は報身にして跡れ、釋迦は應身にして劣るとの見解を存し、明かに應身の釋迦は派生なり劣者なりとの思想を懷いて居るので、決して佛身觀上の正系正統に屬すべきものでない、抑も佛教上の佛身觀を達觀せんと欲せば法華經壽量品に於て眞身應身の關係を說明して二身の不離一體たるを明し、又今番の出世に就ては、之を實在の佛陀の應現作用に歸してその出生を非生現生と說くので、その入滅を非滅現滅と言ふて、以て應身の佛陀は眞身實在者の活動なる事を明かにし、また三世十方に應現活動せる佛陀は、即ち今の釋迦牟尼の作用なることを示して決して他方他佛に恭敬渴仰の心を散失せしむることなく、佛身觀出發の道程を正當に進み行きて其頂點に達せるものである、即ち事實の釋尊に於て深遠なる意義根據を開顯したる結論である、故に之を從劣說勝の佛身觀又は應身常住の妙義と稱するのであつて、釋迦牟尼を信仰の中心生命として之に渴仰を捧ぐべきは萬古動かすべからざる斷論である、然るに今の學佛の教徒が、習慣的信仰の狀態を附會して釋尊中心論を排するが如きは、逆路御耶陀獅子身中の一蟲であつて、眞逆さまに無間大城に墮落して阿鼻叫喚の苦惱にむせぶことであらう、あゝ哀れなる哉。

あゝ朦霧に迷へる人よ、速に來りて壽量品の本佛を渴仰し大慈悲の懷感を享けて佛子たるの地位に進め。

△近來宗教問題の研究につれて、其宗教が、國家又は國民性との接觸がなければ、直ちに排斥の衝點となりて一蹴し去らるゝの潮流傾向があるので、何れの宗教でも無暗矢鱈に國家との關係をつけ樣として居る、さりとて其宗教の本質と日本國との關係、又は信仰と國民道德と云ふ問題は、いま新たに臆面附會を試みたからとて、そううまく調節せる說明が出來るものではない、この頃基督教の海老名彈正氏が、『國民道德と基督教』と題して、徒らに不謹愼なる妄論を逞ふし、理が非でも結びつけやうとする大膽不敵さ、さりとて吹けば飛ぶほどなる教義を以て、いかに巧妙なる修辭を構へたからとて圓滿なる結論は出て來やう筈がない、次にまた墨禿親鸞の門徒が、いやに王法爲本とか眞俗二諦の文字を振りかざして、國家的宗教であることを懸念努力しつゝあるのが面白い、明治四十五年七月三十日の大谷光演氏の垂示が即ちそれである、其文に曰く、『我二諦相依ノ宗風ニシテ乃チ王法爲本ノ教旨ナリ』とある、苟も宗旨である以上は左なくてはならぬ筈ではあるが、親鸞が斯かる教義を演べまたそれを色讀したと云ふ事を聞いたことがない。彼親鸞の一代の教化の事蹟は、專念彌陀往生西方を奬めて餘事の思想信仰倫理の全部を否定したもので、即親鸞の門弟に送りし文に、『一文不知の尼入道の類彌陀をたのみ一念往生決定と信じ名號を稱念すれば彼國に生るゝ事を得べし此外に秘事一言なも人にかたりたへたる義候はず若しおくふかき事を存せば三千世界の諸佛亜に六十餘州の大小の神社の御冥罰を蒙て深く無間三惡道に墮つべし仍て墨禿更らに余の事を存せず候如件』と云ふ起請文がある、是れが彼親鸞のさり氣のない鉛打つたる思想信仰の極致で、日本大小の神明に對する觀念に相違なからう、この文のうちに何處に人間生活の現實社會と交渉する所があるか、『二諦相依の宗風』と云ふのは、時代の潮流に呵責せられたる結果として、强て親鸞の思想信條の中に加へやうとして居るのではないか、けれどもいまだ文字あるだけで親鸞の教義中に融化されて居らぬ、斯の如くいたく矛盾衝突を來たして何が何やら解らぬではないか。

嗚呼妄の一章　愼で聖日蓮の大宣言を敬拜せよ、

爲國爲君爲神爲一切衆生言之也

いかに明晰なる大文字ではないか、其六十一年間の活動史は之れ王佛二法の冥合活現の爲であつて、現實を輕視したものでない、理想を偏重したものでない、國家の尊嚴を重じ信仰の神聖を保ち、而して現實と理想との二方面は適當に融合調節を圖り、天晴れぬれば地明かなりとの給ひて、法國冥合の關係を明示し、誰人でも聖日蓮の遺文を觀ふならば、其の熱烈なる信仰の基礎に立つて、忠誠天を貫くほどの國體擁護の國士なるに感受し、自から襟を正ふして敬意を表せざるを得ない

來れ速に來れ、來りて聖日蓮の人格及主義を研鑽せよ。

△婦人に關する八月發行の雜誌を片ッ端から讀んで見たが、驚くべしだ、慣滅ある修養の資料は僅かに一二あるのみで、何れもハイカラ式の薄べらな、そうして華美虛榮の物欲心を挑發するやうな意味合のものである、それ故にいまの家政學の素養ある女は、さて巾着がしなびてくると嘆めつ面をするやうな腰の弱いもの許りが多くなつて、終日疳をかけたまゝ家事萬端を整へて働く女が少ない、人は働くべきものである、自己の爲すべき事には男も女も共に働くべきものである、女が紅白粉をつけて奇麗になるのは惡くはないが、實際生活の上に家政を擔任し子弟を教養して、適當に働くべき素要と實行力とがなければ女としての價値がない、女は内に在りて能く其範圍をまもり内政を整へ、其人をして充分に活動せしむるやうに心懸けねばならない、或者は婦人なればとて自らを輕んずるものもあるが、それは間違つた考へである、大に自重せねばならぬ、日蓮上人の御言葉に、『女人となる事は物に隨て物を隨へる身也夫たのしくば妻もさかふべし』と仰せられたが、よく〳〵この文意を味ふならば、必ず婦人として自覺を喚び起して其品位を高むることが出來るとおもふ、こゝに一言すること如件(白雲生記)

聖覺門下雜誌記者 例會の記

十八日午後五時統一閣樓上應接室に會吟として例月の大法蠟會を開いた、來會者は、日宗新報社清水記者、布教社宮田栞塚兩記者、大獅子吼社板倉記者、村雲嬰人兒島記者、法響社石田記者、獅子吼會計主任、統一社三上記者の八名、何れも一騎當千の折伏の戰士で虹の如き氣燄を吐いて教界革新の政策を語り、議れる內教團の信仰狀態を遺憾會釋なく叱正すべく相議したのであるが、之を事實の上に力ある劃策を興ふるには、今後筆と舌との二面に亘りて、動すことの出來ない自重確信と精進の勇氣を以て當られねばならぬ、天下俗塵の軍勢甚だ多く、正義の黨同其數至て少ない味方は少ない、而し法王の家人となつたいまの身の上、何條慮病の振舞あつて敵に背を見せることかあつて叶ふものぞ、敢て聖祖の「退轉せしと誓ひぬ」との文字身を體讀して「努々退くこと勿れ」自覺奮闘の實行に進むことが大事である(白みとり生)

病閑の記

暑さを青松白沙の地に避けて清風に袂を拂ふ人のおうき頃、予は色蘊の健康を失ふて、病院の寂寥に靜養する身となつた、洋式六疊一室の南側に硝子窓があるのみで、之が換氣と光線とを採るのだから蒸さるゝほどに暑い、(而し此室は二等室で者生に過る)確かに暑いに相違ない、されども此處横三尺縱六尺の藥布團の別天地は、紛々たる俗事の往來は絶へて清き冥想に就ることが自由である、讀書も自由に充分に出來る、が而し何れも思想の清涼清として極處ある文字がない、中にもあまりに不合理であるとおもつた「聖書の研究」や「警世」や、其他眞宗一派の不穩當なる所論は少しく折伏餘論に書いて置いた、八月發行の文藝教育宗教に關する雜誌六十餘冊を讀むだ、愛山氏の基督教評論、中島德藏氏新著現代處世之試針、高島平三郎氏の應用心理講話を讀み終つて、恩師本多上人講義にかゝる觀書五大部の筆記を整理しつゝその法味を味ひ、さらに壽量品講演輯及び法華經講義を拜讀して統一閣顯の教誡その一分を會得し、無始實在の本佛の靈光に照されて、何とのう心爽かに病める肉も健やかになりしやう覺ゆるものがあつた、

予の病めることは誰れにも告げなかつたが、山根淵兄井村道兄法の響石田主幹熊井師森師吉田芳緒子關田道兄井口道兄金澤師其他の諸氏嘗くさき病室へ訪ねらる、其親情いと心うれし、ことに恩師本多上人より道のため折角療養せよと芳詞を辱ふし感激に堪へない、對日醫正より一書を寄せらる「拜啓病氣入院の由折角加療一日も早く全治遊り候病程つまらぬものなれども南闘浮提の病を本尊と見よとの教も有之病も看樣によりては修養にも風流にゝ相成候事と存じ候昔は維摩托病無量の法門あり小生も病を一藥播州須磨に療養せし事あり命ある限りは病氣も風流に候病中は絶對艦能者の如ければなり人生爲病風流の吟も屢せし所なり勿恐勿驚先精神を壯健にして色體の健康を圖り給へ先は一書御見舞迄是は粗品に候へ共尊右に進し草々」げに其如く修養を積むことが出來た、健康の時に一ヶ月餘もかゝつて讀むべき部數が僅かに十日間で讀み終りた、本誌の編輯もペットの〻で出來あがつた色體の健康はいまだ爲に復しない、しかし命にかゝる病でないことは自らも信じドクトルも言つたが、本誌發送の頃にはペットを離れて道の爲に精勤努力が出來ること疑ひない。(八月五日於病榻白碧生記)

活動史

△十六日午後二時より統一閣にて新人講演を開催まさに炎熱人を焼くが如き時であるが滅却心頭火亦水なりで此信仰の法水を汲で精神を養ふ日蓮主義者は暑さを冒して詰かけてくる定刻に開會を宣し三上本誌記者が「活ける教訓」と云ふ題目立た講題で多くの教訓的道文を引き吾人日常行爲の基準に上人の道訓に由るべしと論し鈴木日雄師は「感激一則」なる題下に陛下聖德の廣大無量なる所以を述べ日蓮主義の信仰に在るものは率先皇恩に報ゆ所あるべしと教へ山根日東師は「光明と清香」と題し日蓮上人の御名より說き起し光明は日にして熱烈を極め清香は蓮にして德の尊ときを示すものなりとて各方面よりこれを說き示されたので聽衆はよく之を傾聽し無有懈怠の美男女共に一段の熱烈なる信仰をおこせるを見うけられた

△十八日午後二時雜誌社聯合の第四回講演會を統一閣に開いた先約の講師に差閊へがあつたので日宗新報社の清水記者に打電して講演を賴んだ何者を措いてもこの淨業に努めばやとて馳せ參られて直ちに登壇「信仰の力用」と題して熱誠溢るゝの辯論を揮ひ人生一切の活動上の源泉は信仰の力に存する旨を說いて深き印象を與へ布教記者栞塚慶俊君は「久修業所得」の文義より說き起して各方面の努力修行の効果を論じ平易に詳々として修行の大事なるを示され三上記者は「處世の要訓」なる題下に「四條金吾殿御返事」の御遺文を奉讀し傾聞するもの不平を懷くものも發奮向上せんとするものも共に來て此の一文を拜讀せよと說き其內容に入りて自受法樂の意義を明かにし苦をば苦をとり樂をば樂とひらく底の自覺と修養を促がして日蓮主義の實生活に交涉あるを誇へたので確かに聽衆の胸に其力を突き徹ふすものがあつた誠によき集りでありしことを喜ぶ

△小笠原島便り　小笠原島は內地を距ること五百海哩南洋戸門島とも稱すべき孤島なり從來の宗教は振はざるにあらざるも多くは迷信の域を脫せず其純乎たる宗教的信念あるを見ず慨かはしいかな數るに先年萩原前都池澤師の布教に次で明治四十三年より吉塚道榮師擔任教師の命を受け渡島せられてより例月三回の法會を行ひ來りしがこのたび有志と共に本義安國會を組織し已に多くの景成者あり吉塚師は毎回日蓮主義に關する講演を爲し漸次盛會を呈しつゝありと云ふ蓋くは同會員一同の異體同心の信行により信其基礎を固ふし同島のために將來の發展を祈ること切也ことに同會員藤野一覺氏等の熱誠に敬意を表す

(一聞生)

東敎海道信

△顯正會八月十四日午後八時より太田妙安寺に例會を開く聽衆一百餘名師は壯重なる態度もて　明治天皇の御聖德に付述ること約三十分次で吉田布教師は日蓮主義と道德と題し日蓮主義は世上一般道德に權威を與へ理義を示し模範を與ふるものなりと論じ午後十時閉會せり因みに吉田師の眞摯着實なる態度は不知不識の間地方青少年の歸する所となり毎年十月より翌年三月迄は青年夜學の指導教養をなし年一回は必ず自ら引率して農學校參觀若くは模範町村の視察を爲すの定ななし已に本年は靜岡縣立農學校を參觀したれば明年は愛知縣立農學校參觀の豫定なりと

△少年會　毎年土曜午後八時に小學校生徒全部を集めて精神的講話を爲す事とし已に第十五の例會を重ねたれば去る十五日迎時大會を開き父兄並に村內有志を集め大講演會を開催せり當日吉田師は少年會の主旨と其價値を述べ次で朝倉師及び小學校長代理栗田君の講演あり了つて茶話會を開き一同和氣藹々の間に午後十一時閉散せり

△八月十五日午前九時より吉美妙立寺に例會を開く聽衆一百吉田布教師は大上人の衣食住と題し豐富なる財料もて簡易明快に述る事約五十分次で白井山主登壇信仰なる題下にて其妙用測り知るべからざるを述べ同十一時閉會せり

△見付第一義會八月十八日　明治天皇陸下二十日祭に當らせ給ふを以つて午後一時會員一同參集し嚴粛なる奉悼會を修し式了つて講演あり朝倉師は日蓮主義と題し日蓮主義の第一義なる所以を說き吉田布教師は聖德太子に始まり傳教大師により復興せられ大聖日蓮により大成したりと論結し山本會長は上人の勤王と國と法華經の一佛一王主義より延いて上人の金言を擧げ至誠無二の勤王家なりと讃じ午後五時無事閉會せり尙當日奉悼會に臨み先帝の御崩御を悼み奉りて(會員市川君)

御崩てらす日の深くとさして雲かくれ
民のなげきを神やしるらむ

此たび日蓮主義によりて女子の品性修養を目的とし增田聖道師主唱者となり既に趣意及規定を發表し其發會式を八月十日福井市相生町妙經寺に開けり四十餘名の會員と共に增田師は先帝陛下の追祐菩提の大法を行ひ更に日蓮上人の女性觀に就て一場の講話を爲して卓越せる教義を傳へ和氣藹々の裡に散會を告げたるが幹事に當選せられたるは萩原芳子中村梅子伊藤ふさ子白石よし子木下はま子前田ひさ子金井虎子山本つる子の八名なりしと云ふ希はくは將來健全なる發達を望む

△千葉縣東金町本漸寺にては此たび大修繕に着手し本堂等を瓦屋根とし本尊を修飾することゝし特に大野鷹兵衛氏の篤志により東京美術學校竹內久一氏に日蓮上人の眞像彫刻を依囑したりと云ふ

福井地會明

教學財團基金寄附申込報告

第四拾參回

▲護持會員

東京市下谷區谷中初音町　本授寺住職　笠原　琢瑞
京都府船井郡桐ノ庄村　大乘寺住職　木村　日順

▲賛助會員

千葉縣金谷法光寺檀家

金五圓　中村　助八　金五圓　中村　政吉
金五圓　石井　長之助　金五圓　小金井捨藏
金五圓　小金井彌三郎　金五圓　石渡　金藏
金四圓　中村　山三郎　金參圓　中村久米吉
金貳圓牛小金井清三郎　金貳圓牛石井作次郎
金貳圓　白井　政治郎　金壹圓　穗市　盛人
金五拾圓也　大乘寺住職　木村　日順

金五拾錢(六)　靜岡縣吉美妙立寺檀家山口中
金四圓(六)　同　同寺檀家　井上　文作
金四十錢(六)　同　同　夏目きやう
金拾參圓廿錢　同縣吉美正學坊住職倉　一乘
金貳圓牛(三)千葉縣幸田本光寺住片岡　義愼
金貳拾圓　同縣山武郡源村　山本熊之助
金貳拾圓　同縣同郡富田幸谷平山由次郎
金貳圓牛(三)　同縣東金觀行坊住　今井眞惠
金貳拾五圓同縣國府臺如意輪寺住井上　日沖
金六拾圓(六)東京淺草慶印寺住職山根　日乘
金六圓(一)　千葉縣南日常本盛寺檀　家中
金五拾圓(一)同縣鷲　大多和來助
金參圓七十錢東京品川妙國寺　檀中　分
金四圓(三)　千葉縣古都邊行禮寺檀　家中
金拾圓　同縣東金淨圓坊住職錦織　日秋
金五圓(九)神奈川縣大豆戸本乘寺檀　家中

▲京都市成就院檀家

金貳拾圓　西村總左衛門　金六圓大橋總右衛門　金五圓　大橋松次郎　金八圓　下村萬次郎(以上完納)金參圓　四方勝海　金壹圓　大槻九郎兵衛(以上第四回)

▲福井縣今庄善勝寺檀家

金貳拾圓　京藤長右衛門　金拾圓　京藤甚五郎　參圓宛　京藤由太郎　京藤源次郎　貳圓　京藤小八郎　壹圓牛　川崎喜作　壹圓　加藤由松(第四回)

▲千葉縣紫名蓮華寺寺檀

金參圓宛　齋藤義藍　同人(爲眞實院菩提)
弁衍モト　內藤セイ　五圓八十錢蓮華寺檀家中(以上第五回完納)

▲同縣一ノ袋延命寺檀家

金貳圓宛　吉原徹郎(六)　飯高富太郎(三)
壹圓宛　吉原熊五郎　中村八一郎(二)　吉原
勝太郎　佐瀨三藏　吉原彌三郎(三)　五十錢
宛　熊澤三次郎　關藤松(六)　三十錢　中村
喜次郎外壹名

▲千葉縣草刈行光寺檀家

金四圓　中村まつ　金貳圓四十錢　木津周藏
金貳圓　加藤德吉　金壹圓廿錢　中村德太郎
金壹圓宛　大野岩吉　伊藤邊藏　四拾錢　中村直作(第五回完納)

▲同縣大澤大澤寺寺檀

金六圓　住職島本順祈(第五回)　參圓　高石仁太郎　貳圓宛　金医豐藏　高石勇之吉　壹圓四十錢　渡邊善藏　壹圓宛　金医芳松　金医石藏　高石猪次郎　高石榮吉　北田周藏
長谷川西松　長谷川直吉　北田元次郎　北田朔一　北田善次郎　北田明三郎　金医元郎
八十錢宛　北田文藏　金医德吉　六十錢宛
高石音次郎　北田門藏　長谷川源太郎　四十錢宛　早川由藏　長谷川伊松　金医正　北田富藏　參拾錢宛　早川岩吉　北田松藏　金医幸藏　早川時三郎　四圓七錢　高石由藏外二十名計(第四回)

▲同縣南今泉本泰寺檀家

金六拾錢宛　八角岩吉　松島源之助　內山治太郎　內山定吉　麻生龜二郎　內山環　四十錢宛　內山太郎吉　內山寅之助　椎名芳藏
內山芳藏　大塚芳藏　北奥榮助　八角勝藏
稻生重太郎　內山芳二郎　內山林太郎　花澤德二郎　內山點造　八角岩三郎　內山岩吉
三十錢宛　水岡清松　內山藤助　田中松五郎
內山竹松　內山太十郎　小倉繁造　麻生初太郎　內山寅松　內山千代吉　鈴木芳太郎　鈴木與助　七圓十錢　內山勇吉　外四十八名(第三回)

▲千葉縣松ノ郷本松寺檀家

金貳拾圓　猪野重之助　金六圓　猪野三郎右衛門　金四圓　猪野三之助　金貳圓　川島孫次郎　壹圓六十錢　並木桃太郎　壹圓宛　並木儀助　金医甚藏　鈴木平藏　中田喜四郎
中田一郎　小高安壽良　小高重次郎　布施良助　八十錢宛　鈴田傳三郎　土肥仙八郎　鈴木儀八　六十錢宛　中田助太郎　土肥源次郎
伊藤文吉　三十錢宛　中田半司　鈴木七太郎
伊藤末次郎　三圓四十錢　中田吉次郎外十九名

▲同縣內田本傳寺檀家

金貳圓　秋田彌三郎　金壹圓六拾錢　常澄彌右衛門　壹圓拾錢　小出平兵衛　壹圓宛　泉水治右衛門　徳田林次郎　小出佐郎　三橋傳次郎　八十錢　木吉源四郎　三十錢宛　常澄忠平　田中角藏　常澄倉吉　馬場和三郎　福井豐三郎　四拾錢宛　田中寅吉　三橋儀重郎
常澄傳次郎　近藤乙次郎　丸山寅吉　五十錢
宮代忠吉　六十錢宛　土橋素次郎　土橋久治
五圓六十五錢　河內金次郎外四十一名計

▲東京品川本光寺檀家

金拾壹圓　小綱源太郎　五圓　栗原政次郎
金貳圓　毛塚金藏

▲名古屋市常德寺檀家

金貳圓　渡邊梅三郎　金壹圓宛　富木庄兵衛
小澤正直　市野善良　太田治三郎　棚橋增吉
平野甚九郎　安部谷次郎　田內乙次郎　六拾錢宛　小阪井新藏　神原祿也　若林覺三郎
安藤秀次郎　五拾錢　水野桂太郎　四拾錢宛
竹內包壽　宮田新兵衛　加藤鐵次郎　森川運助　大津橋豆三　鹽川鈴次郎　岡本治昇　渡邊留次郎　鬼頭文助　佐藤条次郎　參圓　三浦せき外十六名(以上第五回)

▲千葉縣館山本蓮寺寺檀

金四圓　住職中山智秀　金壹圓貳拾錢宛　小芝久治　鈴木眞守　忍足丑松　山口久三郎
高橋淺次郎　堀口龜太夫　松本太之助　小瀧
金次　八拾錢宛　小笠原福松　岩崎定吉　清水尊之助　吉野清藏　鈴木寅藏　六拾錢宛
小高岩次　鈴木爲吉　島山權四郎　吉野吉藏
唐澤萬三郎　太田文吉　山口新九郎　原田誠太郎　川名直吉　中島傳松　秋山長之助　小瀧民五郎　小瀧由太郎　小瀧若松　小瀧惣助
四拾錢宛　石井新藏　飯田亦吉　藤村吉五郎
島野淺吉　鈴木勝五郎　竹田鎌吉　山岸市藏
井上權治　原田龜太郎　澤野榮助　貳圓十錢
池田三次外十名(以上完納)

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候

正價附 三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれども此の種類數品有之候て一々記載する能はす。依て特に佛具正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は。郵券四錢御送附被下候はゝ迅速差呈仕候。此の目錄なから買物安價にでき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は御覽あれば。寺院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも多左の通り

●佛具一切●過去帳の類●大般若經●一切藏經●理趣分●位牌●太鼓●佛書●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●挑子●曲錄●袈裟●珠數●大傘●幕●子●中啓●雪洞●錦●金彌類●水引打敷●和蠟●唐蠟●人天蓋●柴巻類●施鬼幡●幡●幡屋根●木像●厨子●木華●經机●盤子●寒●鐵盤●膳●量器●白鉢●水三寶●寶珠●平椀●鉢●鉢●答●獻茶器●獻菓子●寒●行鉢●蓋●白自在●高皿●長●文庫●具●具類●正價附にして御買物●なから自由

佛具卸部 京都市三條通小橋西入 本錦 三法堂藤田總次 振替貯金番號 大阪一四二五九 東京一〇七一 特電話二千七百八拾三番

●小賣部 同市三條通大橋西入 三法堂佛具陳列場

謹告

曩ニ宗門全般ノ御寄附金ヲ願ヘ着手仕候妙法寺本堂再建ノ儀御蔭ヲ以テ大概建築工事竣工相成候ニ就ハ 管長猊下ノ御台臨ヲ仰キ本年十月廿七日ヨリ三日間開堂供養ノ大法會執行仕候間萬障御繰合御參列相成度此段謹告仕候也

追テ準備ノ都合有之候間特志御參列又ハ團隊參拜ノ方ハ仝十月五日迄ニ妙法寺ヘ御一報有之度候也

大正元年九月一日

會津 妙法寺

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵稅五厘 一ヶ年前金六拾五錢郵稅六錢 代金ハ振替貯金口座東京一二一九番ヘ拂込マレタシ此場合ニハ諸料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

大正元年九月十五日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

東京市淺草區北清島町十四番地

發行所 統一團

統一

第貳百拾貳號

海外の發展　海軍大佐　佐藤鐵太郎

日蓮主義綱要　大僧正　本多日生

佐渡に於ける日蓮上人　文學士　小林一郎

拜伏餘論。活動史

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可（毎月一回）
大正元年九月十五日發行第一卷第二百十一號（十五日）

（東京　三島印刷株式會社印刷）